
黒衣の騎士 誰が為に剣を取る

倉屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣の騎士 誰が為に剣を取る

【Nコード】

N3120W

【作者名】

倉屋敷

【あらすじ】

全略・

神様はどうやら死者の魂を集めて、対抗勢力の駆逐、神界戦争を引き起こそうとしているらしい。そこに、何らかの理由で死に至った主人公が現れる。神様はこれは幸いだと、主人公に対して第二の生を与える代わりに神様の従僕として死者の魂を集めよと提案する。第二の生という餌に主人公は神様の申し出を快諾、世界を駆け回り死者の魂を収集する神々の従僕となる。向かう先々の世界で、一体何が主人公を待ち受けるのだろうか。

000 主人公、神様の抗争に関与する（前書き）

はじめまして

前書きに何を書いたら良いからわからないので

とりあえず挨拶しておきます

ご覧になられた方、どうぞよろしくお願いします。

000 主人公、神様の抗争に関与する

「・・・ということだ、理解してもらえたかね？」

「ええ、なんとなく、漠然とした感覚で良いならば」

古代の神殿を思わせるような造り、神殿の玉座の前に私は居た。いや、今もそこに居たというのだから居たというのは間違いか。

目が覚めた時には既に玉座の前にいた、この表現が正しい。

玉座の前には神を名乗る青年、いや老婆か、刻々と姿を変える為に実際の年齢、性別を推定することは難しい。とは言え、前述の動作は人間には行えない。

故に、逆説的に玉座の人物は神であると判断していいだろう。

さて、この神が言った言葉をもう一度考えなければならぬ。

先ほどは、理解出来たかのような返答をしたが、実際にはまだ理解出来ていない。

一度最初から整理して考える必要がある。

神が言うには私は既に死んでいるらしい。

というのも、私には死んだ記憶もないから推定となるのだが、かといって生きていた記憶もないとくるので否定もできない。

死因は何度訊ねても神は答えなかった。

しかし、聞くたびに機嫌を損ねていった感じからして、私の死因に神が関与しているということが推測される。

まあ、そんなものは所詮推測に過ぎないのだが、何もわからないよりは十分マシであるといえる。

次に、私は死んでいるらしいと話をしたが、死んだ私が何故神殿に居るのか。

これは、死んだ私を神殿に呼び寄せたらしい。

ふむ、つまり霊体、魂といった存在で呼び寄せているのだろうか？私の視点からでは、身体に触れることができる為、一般的に言われる魂等と言った存在とは思えない。

物質体でなければ地面を突き抜けて、遙か地底へと堕ちていっても可笑しくないと思うのだが。

まあ、これも神が為せる業ということか。

理解の及ばぬところはそう考えることにする。

神が私を呼び寄せた理由は、私が死んだことに起因する。

というのも、どうやら神が関与することで私は死んだようだ。

この神が関与するという言葉に問題が集約されている。

神という言葉聞いて何を思い浮かべるか。

生殺与奪、自由奔放、有体に言えばろくでもない人物。

恐らくこの考えは正しい。

本来、人というものは寿命、または役割を終えてから死ぬらしい。

当然、私を取り得る選択肢によっては多種多様な結末を迎え死に至るのだが、私の場合は役割を果たすことなく死んでしまったらしい。勿論、それは玉座にいる神が関与したせいなのだが。

さて、神が関与して人が死ぬとどうなるのか。

人の一生を電車で例えてみる。

本来なら、人は選んだだけの経由地を通り始点から終点までを移動するのだが、自らの役割を果たすことなく死んだ者は線路から外れ脱線した状態になる。

いや、脱線よりも酷い。

というのも、神によって脱線させられたものは、白地の、線路以外

のところを自由に引き来することができるようになる。

過去であれ、未来であれ、自らの生であれ、他者の生であれ、それこそ自由自在に動き回ることができるようになる。

単一の個体という枠組みから外れたその状態は、擬似的な神といっても強ち間違いではないと私は思う。

今までに聞いた話はここまで、状況は理解できたがこの先どうなるのか。

「神様の話を集約すると、私は何らかの理由で死に至り、人としての枠組みを超えたバグのような存在になったという理解でよろしいでしょうか？」

「十分な理解だ。君はある世界で死に至り、過去も未来も生も死も全てを内包する人とは呼べぬ者になった。故に、私は世界の安定の為、君を世界から隔離したというわけだ。その過程で、君の記憶はどうやら抜け落ちてしまったようだがね」

「そこまでは良いのですが、私はどうなるのでしょうか？世界から隔離したとはいえ、私をそのままにしておくことはできないと思うのですが」

「恥ずかしい話ではあるが、君のような存在が生まれてしまうのも単に神の責任である。ここに君を呼び寄せたのは、君を再構成して第二の生を与える為である。故に、君の質問に答えるのであれば、君は生まれ変わることとなる。但し、君の居た世界への影響を考慮して、元の世界とは別の世界へ向かうことになるがね」

なるほど、どうやら私は一度死んで、もう一度死ぬということは避けられるらしい。

いや、神によって殺されないだけで生まれ変わるのだから、結局は第二の人生でまた死ぬということか。

朝三暮四というところか、結局二回死ぬ羽目になる。

やれやれ、まあ、生きた記憶が消えている分、もう一度生きられる

というのは私にとって都合が良いわけだが。

「つまり、私は一度死んで、もう一度死ぬ機会を与えられると、そういうことですか？」

「いや、君を再構成するとはいえ、君は別の世界で一度死んでいる。死人は死なない、故に君の第二の生では死ぬことはできません」

「それは・・・第二の生は不老不死ということなんでしょうか？それとも不死だけとか？」

「形としては不老不死となる。いや、不老不死と呼べるかどうかも疑わしいか、君は私達神がいうところの生きた死者エインフェリアとなる。そういう意味で、君は不老不死であると言える」

「生きた死者・・・私の知識によると北欧神話でいう戦死した英雄、ないしは勇士の魂ということですが、それで正しいでしょうか？」

「そういうことになる。人は須らく神々の支配からは逃れられん。生きている間も、死んだ後もな。本来なら、死んだ者の魂は消滅させるか、神にとって役立つのであれば生きた死者エインフェリアとしてこの神殿内で従事させることとなっている」

「・・・バグの話抜きにしても、私は生きた死者エインフェリアというわけですか」

神は自らの手駒を増やすために世界を管理しているということだろうか。

まあ、理由なしに人間を管理するだなんてことはしないとは思っていたが。

神々が何を人にやらせるかは実に興味深いところではあるが、それよりも私の話だ。

第二の生は、生きた死者エインフェリアとして与えられる。

そして、生きた死者は不老不死であり、失うものは何もない。

ただ、先にも言った通り、生きた死者は魂であるはずだ。肉体はないのだろうか？

「私は、生きた死者エインフェリアという霊体で第二の生を与えられるということでしょうか？」

「それについて、私と君とで相談がある。君が私の話を受けてくれるのであれば、君を受肉させることも考えないわけではない」

「受けるかどうかは兎も角、話はお聞きします。神様が何を考えて取引を持ちかけるか、非常に興味がありますから」

「そうか。率直に言おう、君に頼みがある。君を受肉させて世界に送る代わりに、君は生きた死者エインフェリアを捧げて欲しい。つまり、受肉した君が、その世界で英雄や勇士の魂を集めるということだ」

「何故そのようなことを？死んだ者は全てここに送られ、生きた死者エインフェリアを得ることができませんか。それに、私が生きた死者エインフェリアを集めるということは、その世界で大量のバグを生み出すに等しいと思うのですが」

「まず、前者について。生きた死者エインフェリアを得るのは何も私だけではない。つまりは、順番待ちで生きた死者エインフェリアを得るという非常に効率の悪いものだ。私は、大量に生きた死者エインフェリアが欲しい、まあ、これは後者に関係してくるのだがね」

「なるほど、神様は順番待ちがお嫌い・・・というより、他の神様よりも多くの生きた死者エインフェリアを抱えていたいというわけですか」

英雄、勇士の魂を他の神々より多く集める。

まるで、戦争の準備をし始めているような感じだな。

神々も一枚岩ではないということなのか？

まあ、それはいいか。

今肝心なのは、私が受肉する為の条件だ。

第二の生を与えられるのであれば、可能な限り人に近い方がいい。あくまで、人に近いだけだが。

「そういうことだ。そして後者についてだが、それも問題なくなる

予定だ。というのも、バグを発生させない術は既にあるのだ。ただ、それが神々の派閥というか、対立のせいで実行に移せない。ただそれだけのことなのだ」

「つまり、その対抗派閥との戦争の為に大量の勇士の魂エインフレリアが必要ということでしょうか？ですが、それは神様がこの神殿を掌握するまで、バグは発生し続けるということですよ？それについてはどうするのです？」

「それについては問題ない。バグが発生する原因は、基本的にその世界の人物が、他の世界の人物に殺されるということに起因する。今回の場合、第二の生を得た君は新たな世界に属する為、君が如何に行動しようとも、バグを発生させることにはならない」

「なるほど、理解できました。ですが、私が英雄を殺すには些か問題があると思います。私が、英雄を殺すことができるかという点です。私は確かに不老不死ですが、死なないだけでは英雄を殺せないかと思うのですが」

「その術については、君が受諾してくれた後に渡す用意がある。さて、質問は以上かな？私は生憎、暇な神ではなくてね、出来れば即答で返事が欲しいのだが・・・どうだろう？」

神様の頼みを受諾すれば、新たな世界で受肉した生活を送ることができる。

代わりに、他者の命を奪い続けなければならないが。

まあ、これも等価交換か。

それに、受諾すれば力を手に入れることができる。英雄を殺す為の力だが、これは自衛の為に也十分力を発揮するだろう。

ならば、断るといふ選択肢はないだろう。

「神様の願い、受諾します。というか、エインフレリア霊体である生きた死者のまま世界へ送られても、それは独りでしょう？それは少し悲しすぎま

す」

「かと言って、知人を多数持つ社交性の高い人殺しというのも考えにくいかな。ふむ、では、君に与える英雄を屠る術についての話をしようか。術は三種類、【VP】^{ヴァルキリープロファイユル}、【型月】、【Dies Irae】の中から選んでもらう。説明の必要はあるかね？」

「三種類ということは、先に述べたのは私が手にする力の系統ということでよろしいのでしょうか？そして選んだ後に具体的な物を選ぶと、そういうことでしょうか？ああ、勿論説明をお願いします」

「君の質問についてだが、その通りと答えておこう。そして説明になるが、【VP】は主に魔法系統に値して、この力を選んだ場合は不死の魔法使いとして生きることとなる。破壊も癒しも自由自在、向かう先では大魔法使いと呼ばれることだろう」

「次に【型月】だが、これは近接戦闘系に値し、この力を選んだ場合は刀剣、弓の類を扱い生きることとなる。君はケルト神話を知っているかな？例えば、ケルト神話の英雄クーフリーンの様に魔槍を扱い、向かう先では大英雄と呼ばれることだろう」

「最後に【Dies Irae】だが、これは特殊な系統に類するはずだ。主に、既存の世界の中に異界を創り出すという力からして、他の世界から移ってきた君に相応しいと私は思う。ただ、問題として確固たる願いがなければ力を発揮できぬという問題はあるがね」

神様から示された三種類の力。

まず、魔法と呼ばれる物があることからして向かう先の世界では魔法が一般的であることが推測できる。

それも当然か、神様も勇士の魂^{エインフエリア}として優れた魂を欲しているはずだ。単に刀剣の類を振り回すだけでは勇士の魂^{エインフエリア}とは言えないだろう。

だが、私に示された選択肢の中に近接戦闘系の力というものが存在する。

神様が挙げた例え話は、ケルト神話のクーフリーンだったか。

魔槍を扱うとも言っていたかな？

つまりは、近接戦闘系とは言え、単純に刀剣を扱うのみならず、といったところだろうか。

最後は、確固たる願いを有しなければ使えない力か。

私に願いがあるか、と問われれば自信を持ってであると答えることができる。

記憶のない私がどのような経緯を持ってこのような願いを持ったかは不明だが、この願いは私の偽りない願いだと信じている。

【満たされた刹那を永遠に味わいたい】

これが私の願い。

私にとって、人として充足した生を送ること。

当然神様の願いを受諾することは、願いに反することになるがそれは許容しなければならない。

人として充足するには、まず肉体が、受肉する必要があつたからね。代わりに、自身の願いを叶える為に平気で他者を犠牲にする必要が生じてしまったが。

確固たる願いを持つのであれば、障害など何も気にしないはずだ。

「私に相応しい力ですか。私の願いで神様の言う【Dies Irae】の力が扱えるでしょうか？」

「君の願いか。ははは、【Dies Irae】を扱うには十分すぎる願いだと答えておこう。つまり、君は【Dies Irae】の力を選んだということではないのかね？」

「私はその力を扱えるのであれば、その力を選びます。何より神様推薦ですからね、間違いはないでしょう」

「とは言ったものの、君の願いは確かに十分だ。だが、願いの程度が些か小さい。となると、【Dies Irae】の力を与えたとしても十分に力を発揮することは難しいと考えられるが・・・それでも【Dies Irae】の力を選ぶかね？」

「それはつまり、【Dies Irae】の力ではなく暗に他の力を

選べといつているのでしょうか。であるならば、私は【型月】の力を望みます。馬鹿にしているわけではありませんが、魔法と言いますと、装甲が薄く死にやすいといったイメージがありますから」

「【型月】の力か、ならば君に聞くが、君は近接戦闘で相手を屠るに對し何を用いると思うかね？自身の腕力や種族的な特徴、爪や牙を用いてだろうか？それとも、劍や槍、または弓を用いてだろうか？」

暗に否定するのではなく、断言してくれると私も余計なことを考えずに済んだのだが。

まあいい、如何なる力を得ようとも私は私の願いを叶えるだけだ。さて、この神様の言を考えるに、これから私に与える力を模索しているように感じる。

前者であれば、人ではなく別の種族になるということだろうか？
後者であれば、人のまま、劍や槍を用いて戦うと、そういうことだろうか？

前者については想像も付かないが、後者については神様が例に挙げたように神話の英雄といった感じか？
私の願いからして、人であることは大前提。
となれば、後者以外の選択肢はないか。

「後者ですね。私は死して再度受肉するとしても、人でありたいですから」

「ふむ、なるほどな。では、君は何の武器を望むかね。劍を取るか、槍を取るか、弓という選択肢もあるし、短劍等といった選択肢もある。さて、どれを選ぶかね？」

「弓は装甲に難があるでしょう。短劍は射程に難があり、選ぶなら劍か槍が妥当なはずですが・・・バランスを考えるなら劍が最も優れていそうなので、劍を選びます」

「劍か。^{セイバー}ならば、【型月】の力の内、劍に關する力を君に与えよう。^{セイバー}」

詳細については・・・いちいち述べるのも面倒だ、この資料を参照しておいてくれ」

神様から渡されたのは、【fate/stay night】と書かれた資料。

この資料を読んで、与えられた力を理解しろということかな？

やれやれ、性能云々だけではなく使い方も教えてくれないと勝手が悪いと思うのだが。

「そしてこれが、君が今回向かう世界の資料になる。よく把握しておいてくれ」

「・・・？神様、聞き間違いかもしれませんが、今回向かう世界とはどのような意味でしょうか？」

「ん？ああ、君には出来るだけ多くの勇士の魂を集めてきてもらいたい。単純に、一つの世界から勇士の魂を集めると戦力に偏りが生じる為、複数の世界を回ってもらうということだ」

「はあ、つまり私は神様公認の都合のいい道具といった感じですか。まあ、エインフレリア勇士の魂を集める以外に制約がない分勝手がいいとも言えますが・・・ちなみに、一つの世界でどれだけの勇士の魂を集めればよいのでしょうか？」

「集める量は多くて1000人程度だな。それ以上集めると、世界に色々と支障をきたす恐れがある。ああ、大事なことを言い忘れていた、先ほど渡した世界の資料に載っている人物は殺さないようにしてくれ。彼らの中には優れた英雄もいるが、大半が世界の主要構成要素に近い。欠けると想像もできないようなことが起きる・・・かもしれない。やったことがないからわからんがな」

神様から渡されたのは、【魔法先生ネギま】と書かれた資料。

というよりは、これは漫画本ではないのかな？

まあ、これが資料だというのだから、これをよく理解しておくしか

あるまい。

それにしても、この漫画本に出てくる登場人物は殺すな、か。ということとは、エインフエリア勇士の魂として集めるものはここには載っていない人物になるということか。

適切な言葉として、モブとかそんな言葉が妥当かな。

そんなモブをノルマとして1000人程度か。

大戦争とも呼べるような戦いがあれば簡単に集めれるかな？

「それはよろしいのですが、エインフエリア勇士の魂を1000人程度集めたら直ぐに別の世界に移動するのでしょうか？」

「いや、直ぐにまた別の世界へ赴いて勇士の魂を集めてもらっても困るのだ。これはあくまで秘密裡に行っている。これはあくまで予定だが、何億年と掛けてエインフエリア勇士の魂を集める予定だ」

「となりますと、一つの世界に留まる時間は数百年、数千年単位になると考えていいのでしょうか？」

「そんなところだろう。君にはこの神殿と、君が向かう世界とを行き来できる術を教えておく。その世界での役目を果たしたらここに戻れるようにね」

ということとは、呼び出されるまでは自由に行動できるということか。神様からのノルマとして、各世界で1000人程度のエインフエリア勇士の魂を集める。

これだけが私を縛る要因で、後は自由にできると。

まあ、エインフエリア勇士の魂にできない者もいるから、それはそれで厄介だと言えるが。

たかがそれだけで、再び生を得られるというのであれば構わない。

「さて、私から話すことは以上で終わりだ。君は奥の部屋で自身の能力と向かう先の世界について十分に学んでおくといい。君の準備が出来次第、君を【魔法先生ネギま】に送るとする」

「神様、先ほどから私のことを、君、君と呼んでいますが、私に名は無いのでしょうか？」

「ふむ、名前か。まあ、自由に名乗るといい。私は名など気にしない性質だからね。直ぐに決めれないのであれば、セイバーとでも名乗っておくといいだろう」

暫定的にだが私の名前が決まったようだ。

セイバーか。

異論はない。というよりも、私自身に考え付かないだけだが。

まあ、不都合があれば名を変えればいいわけだから当分はこのままでいくでしょう。

さて、名前は決まりこれから先何をするかだが・・・

差し当たり、まず自身の力量と行く先の世界について学ぶとするか。

この神殿で出来得る限りの行動を事前しておく方がいいだろう。

というのも、私には戦闘経験が無く、また知識としても情報が無い為、ここで先に学んでおく必要がある。

訓練役として・・・神様に頼めばいいか。

自身の与えた力で滅ぼされるなどということはまさかあるまい。

全ての準備を終え、世界に旅立てる日はいつになるだろうか。

その日が、とても待ち遠しい。

000 主人公、神様の抗争に關与する（後書き）

セイバーの能力値、設定については次話を参照してください。

001 主人公、設定が暴かれる(前書き)

神様からもらった力の詳細情報です。
所謂、主人公の設定です。

難易度はイージー。

001 主人公 / 設定が暴かれる

【主人公紹介】

【名称】

セイバー（暫定）

【外見】

漆黒の鎧を纏い、常に仮面を付けている
つまりは、セイバーオルタの恰好
身長は170cm程で、男性

【性能】

CLASS：セイバー

筋力： A

耐久： B

敏捷： B

魔力： A

幸運： A+

宝具： EX

【クラス別能力】

対魔力 A

「<Aランク以下の魔術は無効化、事実上魔術によって傷を負うことはない

【保有スキル】

魔力放出 A

「<身体や武器に魔力を纏わせて強化することが出来る

【宝具】

風王結界C

「<物質を風で覆い光を屈折させて不可視とする宝具

約束された勝利の剣A++

「<所有者の魔力を光に変換後収束・加速させて地上を薙ぎ払う対軍宝具

全て遠き理想郷EX

「<所持しているだけで不老不死を発現、宝具解放により何者にも侵害されぬ究極の結界を展開する

【概略】

何らかの理由で死に至り、神様の従僕として魂を集めることになったエインフェリア。

記憶はないが知識はあり、元あった記憶から湧き出た願いなのか

【満たされた刹那を永遠に味わいたい】

という、平々凡々な日常を愛し、その達成を目指しているらしい。

とは言ったものの、神様の命を受けて世界を飛び回り

1000人程度の魂を神様に捧げるといふノルマを与えられていることから

願いが叶う日は果てしなく遠いか、もしくは期間が短いと考えられる。

また、ノルマを消費する為に神様から【fate/stay night】よりセイバーの力を授かった。

しかし、本人の戦闘経験は乏しく

純粋に【セイバー】の力を受け継ぐことが出来なかったようである。

ただ、宝具自体は十分に継承している為

後は戦闘経験を実戦でどれだけ積み上げられるかに掛かっている。

001 主人公の設定が暴かれる(後書き)

戦闘経験が増えることで保有スキルが増加することがあるかもしれない。

002 主人公、吸血鬼と出会う

「さて、まずは今が何年か知ることだな。場合によっては既にヘラス帝国とメセンブリーナ連合との戦争が始まっている可能性もある。最悪の展開は、既に戦争が終結しているという結果だが・・・」

神様の下で数ヶ月程度、身体能力の確認や資料の確認を行った。結局、神様は忙しくて私の修行に付き合ってくれなかったが、まあ、能力を行使する分には問題ないだろう。

戦闘経験が乏しくても、この世界では十分過ぎる身体能力を有しているのだ。

早々、相手に遅れを取ることはない。

「ふむ、どうやらここは後の日本のようだな。ただ、鬻があることから察するに、まだ幕府が健在なのだろうか。何にせよ、魔法世界での戦争が起こる前でよかったと考えるべきだな」

下り立った場所は恐らく、京都だろう。

あれは恐らく清水寺で、幕府が健在なら年代としては19世紀前後に値するのか？

いや、周囲には鬻を結っていない者もいる。

つまりは、倒幕後で文明開化初頭といったところか。恐らく1890年前後、つまりは麻帆良学園が創立された、創立される程度の年代というわけか。

「これから先のことを考えれば、麻帆良のある関東圏に行くことは好ましくない。となると、ここ関西圏で拠点を構えた方が都合がい

いか・・・さて、どうするか」

後々、ヘラス帝国とメセンブリーナ連合との戦争に介入するのだ、連合に関係のある麻帆良に近づくのは危険だろう。

かといって関西圏にも関西呪術協会とやらが蔓延っているわけだから、安全とはいえないのだが。

ま、関東圏に向かうよりは安全だと割り切るしかあるまい。

さて、関西圏に留まることは確定したが、ではここでどうするか。

真面目に働いて、大戦争が起きるまで待つ、か？

いやはや、そんなことは恐らくできまい。

というのも、今の外見はセイバーオルタの外見に等しい。

神様からセイバーの力を授かった時は普通のセイバーの格好をしていたのだが、私の性質に引き摺られたといった感じで気が付けば鎧は漆黒に、姿はセイバーオルタと化していた。

まあ、あくまで外見だけで、性別まで変わらなくてよかったと思う。神界は本当に不思議なところだ。

「問題は外見なのだ。鎧を纏う、纏わない等の問題は兎も角、金髪の見てくれは女みたいな男に仕事があるのだろうか」

鎖国が終わったといえ、まだ渡来人にはそれほど心を開いているわけではないだろう。

現に、周囲の私を見る目も嫌悪と好奇に満ちている。

まあ、独り言の影響も無きにしも非ずか。

だが、その影響を考慮したとしても、日本人の渡来人に対する好感度はあまり良いとは思えない。

となると、一般的な仕事をするのは不可能か？

「仕事を貰えぬのであれば、私自信が主となるほかないが・・・現状の私にできるのは精々身体能力を任せた剣道道場の設立といった

ところか。刀剣に風王結界を纏い不可視化して、無刀流と称すればいいか。高位の魔術師、いや、この世界だと魔法使いか。ま、優れた魔法使いでなければ見破ることはできないだろう」

戦闘経験がない分、多少はインチキをして道場を設立しようと言うわけである。

インビジブル・エア
風王結界は凡人には分からないだろうし、魔法使い相手でも・・・出来て察することが出来るかどうか程度だろう。つまり、完全犯罪の成立というわけだ。

犯罪ではないが。

「今後の方針は無事に決まった。差し当たり、まず必要なのは道場だ。住居空間と道場は兼ねても問題はないだろうから兎も角道場が必要。道場を手に入れる為の元手として・・・」

元手がないな。

やれやれ、となると山に籠って隠者生活をするしかないか。

どの道、不老不死という性質上、いつかは隠者生活を送らねばならないと思っではいたが、まさかこの世界に来て早速隠者の真似事をする嵌めになるとはね。

「そうと決まればさっさとここを離れた方が良さそうだ。只でさえ渡来人は目に付きやすい、長居は無用だろう」

山奥で隠者の如く独りで暮らすには何が必要だろうか。

単純に考えれば衣住食の三種類があれば問題ないはずだが、衣については問題ない。

魔力で構成されているのか、鎧を着脱する過程で衣服も新品に替わるといった特性があったので問題ないだろう。

住についても恐らく問題ないだろう。

エクスカリパー

約束された勝利の剣で森林を伐採して簡易な小屋を建てるか、もしくは洞窟でも探せばいいだろう。

難点として、即時に完成、発見ができないということか。

最後に食についてだが、これは大問題だ。

採取や狩猟で凌ぐのも良いが、何れは自給自足の生活を送りたい。

だが、農作物の育て方など知らぬ訳だから、まあ、農作物については少々拝借するといった形を取ろう。

私が自給自足の生活を送れるその日まで。

山奥で隠者の如く生活を始めて十数年が経過した。

結局、山間部を切り開いて小屋を作るという計画は無しに、洞窟を基本的な住居とすることになった。

山間部なのに開けた場所があったり、小屋があったりするのは何の為に隠れているか分からない。

本末転倒も甚だしかったからね。

食料の調達は今となっても、近隣農家のお世話になっている。

近隣といっても山を一つ二つは超えた先にある農家だが。

十数年間も私の為に農作物を育ててくれるとはありがたいことです。まあ、勝手に拝借しているだけなんだが。

「それにしても、最近山間部に出入りする人が増えたものだ。時代背景的に、銅山や石炭といった近代化に欠かせない鉱物資源などの採取を行う為に入出入りしていると思うのだが……」

私がこの世界に来て数年を経た頃からか、私の暮らしている山に出入りする人が増えてきた。

私が居を構えた時点では人の出入りなどはほとんどなかったのだが、日本も着々と近代化の一途を辿っているということか。

それは兎も角、山に人が出入りし始めたのは実は問題であったりする。

というのも、獣に追われたとか、足を滑らしたとか、迷子になったとか、何故か人が私の下に集まってくる。

お陰様で私はこの山に住み着いている化け物と、周辺住民に認識されているらしい。

まあ、年と取らないなら仕方がないと思うけど……討伐隊とかは編成しないでもいいね。

「つと、今日もまた来客か。だが、今回の来客は些か妙だな。数多の凡人ではなく、魔力を纏っている……はて、この時代に大魔法使いと呼べるような者がいただろうか」

神様から渡された【魔法先生ネギま】の資料には、この年代に大魔法使いがいるなどという記述はなかったはずだが。

魔力を纏い、こちらに自身の存在を知らせながら近づいてくる。

大胆不敵、余程の自信家なのだろうか。

そんな人物がモブとして【魔法先生ネギま】に登場していたのだろうか？

まあ、態々ここにいるとアピールしながら向かってきているのだ、恐らく戦闘目的ではなく興味本位だろう。

巷で不老不死と謳われる存在を一目見ようと、そんなところか。

さて、あちらは私に会いに来た客だが、同時に望まぬ客でもある。こちらから出向く必要はあるまい。

ただし、姿を見られると厄介だな、甲冑を身につけ臨戦態勢を取るべきか。

漆黒の甲冑を纏い、仮面を付け、インビジブル・エア風王結界を展開しておく。

これで周囲に私の魔力が発現したはずだ、時期に来客もこちらへ来るだろう。

と、臨戦態勢後、即座に目的の来客が訪れた。

「おい、貴様がここに住むという化け物か？」
なるほど。

確かに彼女がここにいるという描写は資料にあった。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

確か、この時期に合気柔術を学ぶ為に日本を訪れていたか？

資料で見た以上に小柄で、まあ、チンチクリンだな。

従者であるチャチャゼロも連れてくる。

好感度は悪くないか？

これなら話することくらいはできそうだ。

「化け物かどうかはさて置き、この山に住む者は私しかませんが、一体何の御用で？」

「不老不死等というものは化け物と呼んでも差し支えないだろう？ どうやら私が探していたのは貴様で間違いないようだが、ふん、御用か。ただの道楽だよ。この山中に不老不死の化け物がいるということから興味を持つてな・・・なるほど、確かに化け物だ」

「私はただ山中にて隠者の真似事をしていただけなのですが、周辺の方々是我的事を化け物と呼んでいるそうですね。まあ、この姿を山中で見れば誤解するのも理解できますが・・・」

「ハハハ、笑わせるなよ。私が貴様を化け物と称したのは見た目の問題ではない。貴様のその魔力が問題なのだ。良くもまあ惜しげもなく披露できるものだ。見つけたのが私ではなく立派な魔法使い共マキステル・マキであつたら、すぐに討伐隊が差し向けられていたところだぞ」

「立派な魔法使いとは初めて聞きましたが、察するに好意的な方々ではなさそうですね。それに貴方も同意見ということがあれば、私と貴方は極めて近い存在であるということが伺えますが・・・一体どなたなのでしょう？」

「はっ？貴様、私のことを知らんのか！まさかこれほどの力を持ちながら、私のことを知らぬほどの隠者であるとは・・・まあいい。貴様が問うたのは私が何者かだったな？私は・・・」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。吸血鬼の真祖で、闇ダの福音との異名を持つほどの魔法使い。悪役の代名詞といったところですか」

「ぐっ！貴様、知っているではないか。まあいい、知っているなら手間は省けた。それで、貴様は何者なのだ？察するに貴様も不老不死なのだろう？」

彼女は同類を探しにここまで来たと言う訳か。

不老不死、吸血鬼の真祖といえども、元は人間。

同類を見つけて嬉しいといったところか。

意外に寂しがりやなのかもしれないな。

「生憎、私自身について語れることはそれほどない。名前も無いよ。うなものだからな。だが、問われたからには答えぬわけにはいくまい。今はセイバーと名乗っている。君が言うとおり不老不死であるのも事実だ。剣術には多少の自信がある。まあ、我流の無刀流が使える程度だがね」

「セイバーと名乗っているとはどういうことだ？セイバーとは異名で、それを正式に名乗っているということか？」

「私には記憶がなくてね。たまたま剣に縁があつた故にセイバーと名乗っているのだよ。ちなみに私の名を知つたのは君が初めてだ」

「・・・私が言うのもなんだが、出会つたばかりの者にペラペラとよく話すものだ。貴様には警戒心というものがないのか？いや、腕を過信してそこまで気が回っていないだけか」

「誰かと話をするのは久しぶりでね。それが不老不死の同類ときたら尚のことだ。それで、私に会うという目標を達成した君はこの後どうするのかね？早々に御暇してくれると助かるのだが・・・」

「ふむ。残念だがそれは出来ない相談だな。これも何かの縁だ、貴様の下でその無刀流を学んでやろう。日本に訪れた土産が合気柔術だけでは物足りないと思つていたところだ、有り難く思え」

戦闘は起こらず、トントン拍子で話しが進んだのは良かったが、最後に難問を突きつけられてしまった。

私から無刀流を学ぶだと？

インビジブル・エア

風王結界で隠した刀剣で相手を襲うだけの剣術なのだが・・・

どう考えても彼女に教えることはできないな。

となれば断るしかないが、素直に承諾してくれるとは思えん。

吸血鬼の真祖という肩書きに、資料によると実力を伴つた自信家であるからプライドも高いだろうし、面倒なことだ。

となれば、逆に彼女を利用するのがいいか。

神様から力を授かつたとはいえ、魔法については素人に等しい。

ここは彼女から魔法について学ぶのが良作か。

「どうせ断つても無駄なのだろう。ま、教えるのはいいが身につくかどうかは別問題だ、私のせいにするなよ？後、条件として君が私に魔法を教えることだ。私は魔法には疎くてね、良い師を探していたところなのだよ」

「隠者の癖に魔法の師を探していたなどと、白々しい嘘だな？まあいい、その条件を飲もう。だが、私が魔法を教えるのは無刀流を極

めるまでだ。貴様は何というか、覚えが悪そうだからな、貴様に魔法を教えていたら不老不死といえども時間が足りない」

「やれやれ、酷い言われようだ。まあ、私もその条件で構わない。だが、この契約、破棄はさせないよ？それと、無刀流を学ぶのであれば私のことをマスターと呼ぶように」

「はっ、抜かせ。どう考えても私がマスターだろう。貴様……いや、セイバーはこれから私のことをマスターと呼べ。弟子が無様だと私の名も墮ちる。手など抜かぬからな、しっかりついてこい」

「まあ、エヴァンジェリンをマスターと呼ぶのが妥当か。こんな幼女にマスターと呼ばせたら世間体が悪いどころの話ではないからな」

「セイバー、貴様よりもよって私のことを幼女呼ばわりだと？！これでも私は500年近く生きているのだ、それでも私のことを幼女呼ばわりするのか？！」

「なんとということだ、幼女なのにババア。幼女にも、ババアにもマスターと呼ばれたら問題があるとしか思えない。やはり、ここはエヴァンジェリンをマスターと呼ぶしかないということか……」

「ふふ、ハハハハ！セイバー！黙っていれば調子に乗りおって、その口閉ざしてくれるわ！チャチャゼロ、遊んでやれ！」

「ケケケ、コノママ出番ガナイカト思ツタゼ。悪イナ兄チャン、コレモ命令ナンダ悪ク思ウナヨ」

エヴァンジェリン、思った以上に扱い易いな。

これは結構なことだ、中々飽きもせず楽しい日々となるかもしれない。

こんな日々がずっと楽しめたらよいのだが……

まあ、それは兎も角、今は彼女から逃げるのが先だ。簡単に捕まってしまうては彼女も面白くないだろう。ほどほどに逃げて、そして捕まってもやらなくてはな。

003 主人公 / 観光旅行 / 魔法世界編 (前書き)

やや早足です

日常系を書くのは少々後になりますかと・・・

「マスターことエヴァンジェリンが私の下に來てから数十年が経過した。最初は傲岸不遜だった幼女も、今では多少の愛嬌を見せ始め私を愉ませてくれる唯一のパートナーとなっている。見た目は成長していないが、中身はしっかりと変化しているらしい」

「おい、セイバー。貴様どこを見ながら話しているのだ。壁に向かって話し始めるだなんて気が狂れたか？それと私が愛くるしいのは元々だ」

「気が狂れたわけではない、どうしてもそうする必要があると思っただけだ。それはさて置き、ここがヘラス帝国領、グレートブリッジでいいのか？巨大要塞という名の通り確かに巨大だが、些か損壊が激しいように思えるが」

「元はメセンブリーナ連合の軍事拠点だったのだ、それをヘラス側が制圧し支配下に置いた。ならば、攻略作戦で要塞が傷ついていても可笑しくはあるまい。それに、全長300キロに渡る要塞なのだ、早々修理などできん」

「マスター、意外に詳しいな。魔法世界を訪れたことがあると言っていたから、興味本位に巡り歩いて見たのか？そして600万ドルの賞金首になつたと」

「ふん、吸血鬼と聞いただけで襲い掛かってくるような奴らなのだ、仕方あるまい。で、いい加減に教えて欲しいものだが、態々グレートブリッジに來た理由はなんだ？しかも、大戦中という極めて危険な時期にだ・・・腕試しのつもりか？」

グレートブリッジに來た理由か。

確かに腕試しの用もあるが、最も大事なのは1000人の魂を神殿

ヴァルハラ

に送り届けるということだな。

腕試しはエヴァとの魔法鍛錬である程度は掴めているとはいえ、あくまでそれは鍛錬に過ぎない。

同じ不老不死である彼女を殺せるかどうかは非常に興味があったが、万が一にでも殺してしまつたら大問題だ。

要するに、私が全力を出せる場が欲しいと、全力で人を切りたいということだな。

いや、この物言いは些か危ないか。

やはり、腕試しという物言いの方が他者から見ても賛同を得やすいか。

他者といつても、エヴァしかないわけだが。

「腕試し、確かに腕試しのつもりでここに来た。それもあるが、個人的に魔法世界を訪れて見たいという思惑もあった。戦場という観光地巡りだが、それも中々のものだと思つが・・・マスターは私と一緒に不満かね？」

「血生臭い観光地巡りなことだ。まあ、嗜むほどに血を味わえる環境というものは悪くはないが、態々主戦場に来る必要もないと思うのだが？それと、マスターと呼ぶのは止めると言つたはずだし、一緒にいるのも悪くはない」

「マスターと呼べと言つたのはマスターのはずだったが・・・了解したよ、マスター。主戦場に来た理由は、単純に主戦場の方が人が多く、且つ有力者もあるまると思つたからだな。私共の相手は、並みの術者じゃ務まらんだろう？」

「セイバー、貴様私をからかつて遊んでいるだろう？飽きもせずご苦労なことだ。確かに、私たちの相手は並みの術者では務まらんが、同時に務まる相手など早々いないぞ？伊達に最強を自負しているわけではないのだからな」

「最近のエヴァはからかいがないな。出会った頃のように、もっと愛想が欲しいものだが。まあ、あくまで最強は自負だろう？そ

れに、個人戦なら兎も角、団体戦ならいい勝負をしてくれる者もいるかもしれないぞ？」

「セイバーに付き合っていたら身が持たんことは重々承知しているからな。ま、そう思うなら期待して戦場に赴くがいい。私は高みの見物だ。というより、貴様の实力を見てみたいというのがあるからな。私との鍛錬では本気を出していなかったらどう？」

ふむ、エヴァは乗り気ではないのか。

意外と悪事に積極的ではないと、そういうわけか。

元人間というのは私も同じだが、やはりどこかで差が出ると、そういうことだな。

実に興味深いことだが今はやめておこう。

さて、先ほどエヴァは私の实力を見てみたいと言っていたな。

この願い、叶えるのは容易いがどうしたものか。

彼女と出合ってから幾度となく実戦形式の鍛錬をしたが、一度も全力を出したことがない。

というより、エヴァの全力を以てしても、私の対魔力を一度でも超えることがなかったので仕方があるまい。

この事実には拍子抜けしたが、自身の防御力を把握できたのは悪くなかった。

ま、それ以来私はエヴァのサンドバック状態になったがね。

守りについてはこれくらいか。

問題は攻勢の方だった。

守りも過剰だったが、攻めも過剰だった。

どうやら、この世界の魔法を以てしても風王結界を打ち破ることはできないらしい。インビジブル・エア

つまりは、不可視化を解除する術がないということ。

これだけでも、近接戦闘においては十分な利点を誇っていた。

ただ、真名を解放して風王鉄槌ストライク・エアを放つてみたが、これは少々火力に難がある。

あくまで暴風といった点に問題があるのか、エヴァの魔法障壁の前には為す術がなかった。

運用方法としては雑魚掃討が正しいのだろうか、これだけなら不可視化を継続した方が利点があつた。

ま、それだけでも十分なのだが。

ちなみに、約束された勝利の剣は一度も使つたことがない。

流石にこれだけは撃たずとも結果が見えているが、折角エヴァに乞われているのだ撃つて見るべきか。

それに、私も一度くらいは放つてみたい技でもある。

「本気とは言うが、剣一本しか持たない私には選択肢が多くないのだよ。近接攻撃しか術がないのに大技など扱えまい。多彩な魔法を使うエヴァではないのだ、私にはただ近づいて切り刻むくらいしかできんよ」

「近接攻撃しか術がないとはよく言う。その剣に何度魔法障壁を破られたか数え切れんぞ。だが、剣術以外に術がないのは事実か。実際、セイバーには魔法の才能がさっぱりなかったわけだからな」

「ふむ、結局は私に魔法を扱う才能がなかったのか。エヴァは当初、魔力の質が根本的に異なる為アールテスカットに扱えないといつていたはずだが」

「恐らくは両方だ。ま、火よ灯れも出来ぬようでは才能があるとは言えまい。事実、風王結界だとかで魔力を扱うことはできるのだ、魔力の質の問題もあるがセイバーに一般的な魔法の才能がないといか言えないだろう」

「近接攻撃以外に魔法が扱えると、戦術の幅が広がったのだがな。ま、そんな偏りがあるからこそ、私が前衛でエヴァが後衛と役割分担が出来ているわけだから良しとするか。で、エヴァは今回参戦せずに高みの見物をするのか？」

「ああ、そういったらどう？ 死角を塞ぐ程度の助力はするが、それ

以外は手を貸さん。たまには貴様も全力で戦うがいい。鍛錬時にも涼しげな顔をしておつて、憎らしい奴だ」

「エヴァがいつも全力を出し過ぎなのだとは私は思うがね。それと、前に日本刀を使ったときはダメージが通りそうだったじゃないか。魔法だけに拘るのは良くないと思うよ」

「確かに日本刀ならいけるかと思つたが、今度は武器の質という問題がある。生半可な武器では折れずに済むのが関の山だっただろう？大半は折れて使い物にならない」

「日本刀は打ち合うための武器ではないからな。なら、徒手空拳、体術で挑めばいいだろう？あれならば、対魔力の問題もなく私にダメージを与えられる」

「ハ、素手だと？貴様相手に素手で勝負を挑んでどうするのだ。まあ、散々鍛錬を積んだからこそ間合いが分かるが、素手で貴様に立ち向かうなど正気ではない。それと、貴様の回復力は以上なのだ。殴つたそばから傷が癒えるなど、反則だろう」

「とはいっても、それも私の魔力より為されている訳だから・・・私の魔力が尽きるまで続ければダメージを与えられると思うが。それか、回復するより早く攻撃を繰り返すかすれば良いだろう」

「それが出来たら苦労しないだろうが！大体、私の前で一度も魔力切れを起こしたことはない奴がよく言つたものだ。それに、連撃を貰うほど貴様は御しやすくあるまい。むしろ連撃などしたら二発目には首が飛んでおるわ」

とは言つたものの、打撃や斬撃は普通に通用するのだがね。

魔法に関して言えば対魔力Aのお陰で心配する要素は皆無なのだが、近接攻撃に関して言えば問題なく通る。

確かに、全て遠き理想郷のお陰で治癒速度は向上しているが瞬時というほどではない。

それでも、交戦中に連撃を貰わなければ十分に癒えてしまう程度の速度ではあるが。

「それで、結局グレートブリッジに来たのは観光ということではないか？ここは既に最前線ではないから、腕試しをするならば先に進まねばならんぞ。ヘラス帝国にしる、メセンブリーナ連合にしるここに手を回している余裕などないはずだが」

「それなら問題ない。今夜メセンブリーナ連合の英雄達を含む大艦隊がここを襲撃する手筈になっているからね。ヘラス帝国もそれを承知のはずだよ？だからこそ、私達も要塞内に入ることができたのだ。味方を装ってね」

「はっ？！そんなことは初耳だぞ！しかも今夜だと！そういうことは先に言え・・・待て、どうして貴様がそれを知っているのだ？ここに来るまで私と道中を共にして寄り道など一度もしたことがなかったはずだが」

「ふむ、強いて言えば歴史を知っていると云ったところだな。だが、それはあくまで私がいなかった場合の歴史、私が今ここにいる以上多少のずれは生じてくると思うが・・・早々違わないだろう」

「未来予知等ではなく、歴史を知っているというのか。ハハハ、冗談が過ぎるぞセイバー。いくら貴様が規格外の性能を誇っているとも、そこまでは出来まい。仮に貴様がこの先の歴史を知っているというのであれば、この戦争どちらが勝つのかも知っているのだから？貴様の言が正しいというのならば、その結末をここで言うことは容易い」

「つまり、エヴァは証拠として私に歴史を語れと、そういうのだな？ま、言っても悪くないのだが、歴史を語ることでエヴァを縛ることになるのだが、それでも聞くかね？」

「ハハハ、私を縛るだと？貴様が語る歴史など所詮歴史に過ぎない。そんなものはいくらでも変えることができるのだ、私が縛られるはずがあるまい。故に、ここで貴様の言う歴史を話しても構わん。さあ、セイバーの言う歴史を言え」

「やれやれ、ならば答えよう。この戦い、勝者も敗者もない。へ

ラス帝国もメセンブリーナ連合も和平という形で終結してしまうからな。強いて言うならば、勝者は紅き翼アラルブラ、敗者は完全なる世界コスモエンテレケイアといつたところか。尤も、それすらも怪しいものだがな」

ふむ、余計なことを口走ってしまったかな？

まあ、別に構わないだろう。

エヴァも歴史など所詮歴史だと言っていたし、ある程度の未来を知つていても問題あるまい。

どの道、私がこの世界に深く関わるのはここまで、10000人の魂ヴァルハラを神殿に送り届けるまでなのだ。

それより後は、再び隠者の如く生活をするまで。

神々に再び呼ばれるときまでは、という期限付きだがね。

問題と言えば、彼女か。

今回も、なんだかんだ彼女は私に付いてきた。

これは、出会った頃から何も変わらず、どこに向かうにもずっと二人だった。

彼女はこれより後も私に付いてくるのだろうか？

それとも、私から離れていくのだろうか？

それだけが唯一の気がかりと言えるが、もしかしたら逆に私が彼女に付いていくということも考えられるだろうか。

そして、悪を謳う彼女の為に剣を取るようなことも・・・

「セイバー、紅き翼アラルブラが連合の英雄共を指すのは分かるが、完全なる

世界レケイアについては初耳だぞ。ヘラス帝国もメセンブリーナ連合も壇上

に上がらぬというわけだから、完全なる世界コスモエンテレケイアがこのどちらかの勢力

であるということがあるまい。ならば完全なる世界コスモエンテレケイアとはなんなのだ」

「完全なる世界コスモエンテレケイアか。まあ、魔法世界に住む人々の共通の敵だと考え

てくれればいい。故に、ヘラス帝国とメセンブリーナ連合は大戦中

でありながら、手を取り合って完全なる世界コスモエンテレケイアと戦うと言っわけなの

だからね」

「つまりはこの大戦を影から牛耳っているのが完全なる世界というわけか。なるほど、そして完全なる世界を紅き翼アラルブラが打ち倒すから、勝者は紅き翼アラルブラ。ふん、詰まらんな実に詰まらん。英雄が勝者となる物語など、ありきたりだとは思わんか、セイバー？」

「悪役であつても勝者になることは容易い。歴史を語るのは勝者の特権だからな、そのような物語になるに決まつている。それとエヴァ、気に入らなければ自分で変えるべきだ。完全なる世界に与して勝利を掴めばいい」

「何故私がそんなことをしなければならぬ。セイバーがするといふなら考えぬわけでもないが、私だけならまずやらん。そんなことをしても私には何の特にもならんからな。無駄もいいところだ。だが、幸い紅き翼アラルブラとの交戦は避けられぬ状態にあるらしい」

「要するに、気に入らないからこの機会に倒してしまおうと、そういうわけか。それにしても意外だ、エヴァが私の言をそれほど信じしてくれるとはね？ 妄言や戯言の類だとは思わなかつたのか？」

「貴様は私をからかうが、決して不利になることは発言しないからな。故に、まあ信じてもいいだろうと思つたまでだ。さて、奴らが来るのは今夜だったな？ となれば開戦まで数時間少々、それほど余裕はないな。セイバー、さっさと準備をするぞ。英雄などと言つふざけた奴らに遅れを取るわけにはいかないからな」

これは少々困つたことになつた。
思った以上にエヴァがやる気で、紅き翼アラルブラとの対決は避けられそうにない。

モブ以外を殺すと問題が生じる可能性があるると神様に釘を刺されたこともある、迂闊に殺すわけにもいかない。
かといって、手加減が出来る相手でもないか。
手加減をして、私やエヴァが手負いとなり、元も子も失う結果となつては話にならん。

故に全力で退けるしかないか。

理想は、紅き翼アラルプラとの個人戦はそこそこにグレートブリッジが陥落すること。

戦略的に敗北すれば、流石のエヴァも撤退に賛成するだろう。

出来れば、私達が傷つくことなく勝利したいところだが・・・さて、どうなるか。

004 主人公、巨大要塞を破壊する（前書き）

魔法世界編と学園に向かうまでの話は構成してありますが
学園で誰を登場させるかはさっぱり決めていません

エヴァだけで事足りるといえばそれまでですが
さて、誰を出そうか

004 主人公 / 巨大要塞を破壊する

「セイバー、貴様紅き翼アラルプラがいつ攻めてくると言っていた。私の記憶によると、奴らが攻めてくるのは今夜だと認識しているが・・・敵襲の気配がさっぱりしないぞ」

「単純に正面からグレートブリッジを攻略しようなどと考える指揮官はいないと思うが。ま、直ぐにでもメセンブリーナ連合の攻略作戦が始まると思うよ？」

「とはいえ、これだけ静かなのだぞ？確かに、大規模転移魔法によって奇襲を行うと言う選択肢もあるが、あれはヘラス帝国側が実戦投入したのみで、メセンブリーナ連合には例がないはずだ。ヘラス帝国側と同様の運用ができるとは思えん」

「答えは既にエヴァが話したんだけどね？大体、メセンブリーナ連合が攻めてくることは重々承知のヘラス帝国、この巨大要塞グレートブリッジがどうして沈黙しているんだろうね？人っ子一人いないとか、要塞監視システムが起動していないだとか、そんなことが考えられるかい？」

「なるほど。セイバーは既に敵の攻撃を受けていると、そう言いたい訳だな？私達のように単独で行動でき、且つ他者が私達を認識しても違和感を感じない程度には認識阻害魔法を使えると」

「ま、後者は兎も角、前者はそうだろうね。要塞攻略には内通者という方法が最も簡単。外から破るのが困難であれば、内から破ればいい」

「ならば、直ぐにでも戦闘が始まると言うわけだな？だが、それはメセンブリーナ連合側の思惑が嵌り過ぎて面白くない」

「・・・してもいいが、お手柔らかに頼む。場合によっては、私達はヘラス帝国とメセンブリーナ連合の双方から追われることになる」「それは出来ん約束だな。大体、魔法世界の賞金首が狙われぬはず」

があるまい。この場においては何をやっても私のせいになる、悪役の役得というやつだな」

このまま様子見を続けるとメセンブリーナ連合の都合よく事態が進行する。

辺りが静寂で消音も十分、それでいて内通者を動員すれば要塞砲や魔法結界を停止することができる。

まあ、恐らくは停止、巨大要塞を落とせる気にいるのだから破壊なぞと言う選択肢は取らないだろう。

故に、奇襲が成功し且つ巨大要塞が陥落ともなれば、メセンブリーナ連合には最善の結果となる。

エヴァはこの結果が気に食わないらしい。

ならば如何にしてこの結末を回避するか。

問題なのは要塞内のヘラス帝国軍人がこの異常に気づいていないことである。

したがって、彼らの目を覚まさせるような、例えば、要塞内で大規模魔法が使われるなどと言ったことが起こればいい。

そうすれば、認識障害魔法が掛かっているとしても彼らはこの異常事態に気付くことが出来る。

つまりは、エヴァの目論見通りとなるわけだが・・・

が、目論見通りとなると当然矛先はエヴァに向かうことになる。

彼女自身がそのように想定している以上、その結果を受け入れるつもりのようなが、私としては些か納得がいかない。

というのも、彼女は基本的には戦闘は好まないし、何より弱者を黷る趣味もなく、女子供に手を下すことも行わない。

あくまで、歯向かってくる者、賞金稼ぎや正義を掲げて敵意を向けて来る者にしか手を下さない。

悪役と名乗る割には明確な線引きを施しているというのは私とは極めて大きな違いだと思う。

むしろ、自身の自由欲しさに1000人の魂を神殿ヴァルハラに送る、そんな私の方が悪役を担うべきだと。偽善だと罵られても、それでも彼女が泥を被るのは納得がいかないところである。」

彼女が吸血鬼にさえならなければ、いや、人が吸血鬼というレッテルだけで評価をしなれば、彼女は生前のまま喧騒に巻き込まれること無く生活ができたはずなのに。

「・・・エヴァ、張り切つているところ悪いが、ここは私に任せてもらおうか。何、特に理由はないさ。ただ、エヴァも私の本気を期待しているのだろう?」

「ん?なんだ、セイバーが自ら」私がやるう」だなんて言い出すとは珍しい。一体どういう風の吹き回しだ?」

「エヴァは私の本気を見たい。そして、メセンブリーナ連合の思惑が外れることを期待している。事を済ませるのに二度も手間を掛けるのはどうかと思つてね。私が出しゃばろうと言つ訳だ」

「セイバーが手間を掛けるのを厭うだと?はっ、笑わせてくれる。貴様はむしろ、無駄を好む方だろう?平々凡々な生活を、当たり前

の生活を愛していると言つていたじゃないか」

「その通りだ。だから、私は日常エヴァの為にを守るためにやるうとして

いるのだ」

「その割には、戦争に好んで顔を出すなどと言う奇特なことをする。セイバー、一体何を隠しているのだ?彼此、数十年來の付き合いだがその私にも言えないことなのか?」

「・・・それについては事を要塞戦を終えたら話をしよう。何しろ、それは私が歴史を知つていふと言つことにも関係しているからな。だから、その疑問はいま少し胸の内にとめておいてくれ」

「貴様が歴史について知つていふことについては何れ聞こうと思つていたが、自ら話してくれるというのであれば手間が省けるな。ふ

ん、約を違えるなよ？この要塞戦を終えたら、包み隠さず答える」

勢いで私が歴史を知っていると云うことを話してしまったが、これは良かったのだろうか。

まあ、神様からはこのことを話してはならないとは言われていなかった気がするから許容されるとは思うのだが……

禁止されていたのは、過剰に魂を刈らないこと。

あとは、この世界の主要人物の魂を刈らないこと。

この二つだったはずだから、恐らく問題ない、か。

やれやれ、前途多難とはこのことか。

やることは多い。

この要塞戦で1000人の魂をヴァルハラ神殿に送ること。

これは神様との約束であり、私は今此処にいる為の条件だったと言っている。違える事はできない。

また、その過程で全ての憎悪を私に向けさせること。

エヴァにはエヴァなりの悪の道がある。私利私欲に塗れていない彼女が、このような琐事、私の都合だけの問題で道を外れるべきではない。

ない。

最後に、エヴァに私のことを説明する。

これが難関か。容易に話すべきことではない。

彼女はと思うだろうか？

私が一度死んだ身で、新たな世界で受肉し、刹那の安息を得る為に1000人の命を奪うと言ったら。

彼女はなんと云うだろうか？

S i d e E ヲ ア

セイバーめ、また何やら考え込んでいるな。

恐らく、奴を悩ませているのは本気を出すと言つことと、隠し事をしていたということだな。

前者については私が原因か。

まったく、セイバーの考えることなどお見通しだ。

どうせ奴のことだ、私が無闇矢鱈と手を下すのを好まないと言つことを知っているはず。

つまり、そうさせないが為に、今此处で全力を出すと言いだめたのだ。

ふん、無駄なことを。

今更取り繕つても、いや、例え取り繕わなくとも結果など変わらん。セイバーが手を下すということは単に悪役が1人から2人になるだけに過ぎない。

見方によつては状況が悪化していると言える。

まあ、その気持ちは有り難いのだが。

後者についてはセイバー自身の問題だろう。

奴がどのような過去を持つにしろ、どのような隠し事を持つにしろ、そんなものはどうでもいいのだ。

誰にだつて言いたくない過去はあるだろうし、当然それに付随する隠し事もあるだろう。

奴は深刻そうな顔をしているが、私としては奴の過去など一度も聞

いた例がないからむしろ喜んでいくくらいだというのに。

大体、過去がどうであつた程度で嫌うならば最初から一緒にはいないだろう？

いや、これは私の思い上がりだろうか。

もしかしたら、奴は私と一緒になど居たくないのかもしれない。

ただ、情性で今も共に居ると、そうなのかもしれない。

だが、セイバーも私と同じ願いを抱いていて欲しいと、そう思う。

「それでセイバー、貴様の本気を見せてくれるという話だが、その剣が本気を出す為のものでいいのか？前見たときはもつと白く輝いていたはずだが・・・今は実に黒い。貴様の甲冑も大概だが、その剣も大概だぞ」

「どうやら聖剣も私の内面に引き摺られて黒化したようだな。それは兎も角、これから私が全力を以て巨大要塞グレートブリッジを攻撃するわけだが・・・その間、危険だから私の影に入っていて欲しい。影を介した移動ができるのだから留まることもできるのだろうか？」

「それは勿論可能だが、それほど危険なのか？確かに要塞内から破壊行動をするのだから、色々問題があるとは思うが私が隠れるほどとは・・・まあいい、セイバーがいうのなら隠れていよう。とは言つても、影の中から見ているがな」

「万が一をいうこともある、そういうことだ。不意打ちの魔法は私には通用しないが、私の妙技に見惚れているエヴァ相手なら容易に奇襲が成立するだろう？だから、影の中に隠れていてくれ」

「ぬかせ。見惚れることはまだしも、私に奇襲が成立するわけが・・・ん？ちよつとまで、今のは無しだ！」

「はいはい、ならちゃんと影の中に隠れていてくれ。ついでにその赤くなつた顔を何とかしてくるんだな」

ぐっ、調子に乗りおつて！

ふん、貴様の考えることはお見通しだ。

この場に当事者はセイバー独りだと、私がいないように装うために隠れていると言うのだろうか？

それぐらいわからないと思っただか。

ふふふ、その思いは悪くない、悪くないが。

最後のあの言葉、淡々と言われたことだけが気になるな。

やはり、一緒にいたいと思うのは私だけの気持ちなのだろうか。

「さて、エヴァ。私は君に魔法使いの定義を聞きたい。エヴァの謳っている魔法使いの定義とは、何だったかな？」

「定義だと？定義などセイバーに話した覚えはないが・・・ああ、あのことか。大規模な戦いで魔法使いの役目とは、究極的にはただの砲台。つまりは火力が全てだ」

「そう、火力が全て。今までは私が前衛、エヴァが後衛だった故に私は全力を出す必要がなかった。私が全力を出さずとも、エヴァが砲台として機能してくれていたからね」

「とは言っても、それほど実戦経験があるわけではないがな。あくまで賞金首に狙われたとき程度だろうか？それで、それがどうしたのだ」

「いや、ただ私にも、単に砲台としての火力が有ることを言っておきたかっただけだ。剣を不可視化して戦っていたのは、私が剣術だけしか身に付けていないからではない。相手に剣術しか扱えないと思わせる為にあるのだ」

「ふん、そんな自慢はいいからさっさとやれ。メセンブリーナ連合が来るまでに、そう時間があるわけでもあるまい」

「やれやれ、では始まるとするか」

セイバーの全力、それも究極的な火力か。

奴が語る火力とはどの程度のことをいうのか。

私の”おわるせかい”よりも火力があるというのか？

それならば、今後は私は完全に遊撃扱い、いや、セイバーに切り札がある以上は力を惜しむ必要がないというわけか。

つまりは最初から全力で・・・なっ?!

ちよつと待て、なんだこの魔力の集まりようは!

これは洒落にならん。

”おわるせかい”等とは比べ物にならんどころか、もはやこれは・

・あまりの魔力に空間が歪み始めたというか、なんだか嫌な予感しかしないな。

これはさつさと奴の影の中に避難するし・・・

「^{エクス}約束された ^{カリバー}勝利の剣　！」

S i d e セイバー

一撃で要塞正面を粉碎・・・といっても内部からだがね。

ふむ、結果は上々か。

^{ヴァルハラ}神殿で扱い方だけはマスターしたが、実際に使ったことはなかったからな。

とりあえずは、実戦で問題なく使えた。

今回はこの点を重視して、^{エクスカリバー}約束された勝利の剣について考察するのは止めておこう。

恐らく、込める魔力の問題がネックとなってくるはずだが、まあ、強い分には問題ないだろう。

さて、エヴァはどうなったかな？
影の中からしつかりと見ていてくれただろうか。

「セイバーの阿呆が！私が影に潜る前に技を放つとは何事だ！しかも、なんだこの火力は！この要塞を見てみる、仮にも300キロメートルある要塞が木っ端微塵になっているじゃないか！要塞の一部を破壊どころではないぞ！」

「ふむ、これは些か想定外かな？まあ、この技を放つのは今回が初めてなのだ、仕方があるまい。エヴァ、それはいいのだが、早々に撤退したいから影に隠れてもらえるか？」

「使ったこともない技を実戦で使うんじゃ・・・いや、だからといって私との模擬戦で使おうだなんて考えるなよ？私が喰らったら粉々ではなく、消滅する。こんなもの相手にしたら不老不死だとか、再生能力などどれだけあっても足りん！」

「その可能性は十二分にあるな。ああ、それとエヴァも目論見は失敗に終わったよ。丁度、メセンブリーナ連合がグレートブリッジに攻撃を開始し始めたようだ。まあ、そのお陰で1000人の魂を集めるというノルマは達成したのだが」

「なら、早々にこの場を立ち去らねばならないか。そうしなくては、折角のセイバーの好意も無駄になってしまっからな。最後の言葉に気になるところがあるが、どうせ後で教えてくれるのだろうか？ならば今は逃げるが先だな」

「了承。エヴァは私の影のなかにいて道中の索敵を任せる。私はそれに従って駆け抜けるよ」

ふむ、要塞は木っ端微塵か。

私はそれほど目が良いわけではないから、それほど細かい結果はわからないのだが、夜目が利くエヴァがいうならそうなのだろう。

まあ、別に要塞がどれだけ壊れようとも支障はあるまい。

人が1000人以上死んでさえいなければ、問題はないと・・・

ああ、今の一撃で主要な者は死んでいないだろうか？

恐らく、メセンブリーナ連合の上層部の考えとして、英雄にしゃしやり出られるのは好ましくないから最前線に最初から居るなどということはないだろうが。

ま、過ぎたことを言っても仕方がないか。

死んでいたら死んでいた、そう割り切るしかあるまい。

その結果世界がどうなるかはわからんがね。

とりあえず、今はここから離脱することだけを考えよう。

そして逃げ切ったら、エヴァに伝えなくてはならないことがある。

やれやれ、用事の大半は既に終えることができたが、最大の難関がここに残っている。

せめて、エヴァには嫌われないように、そう願うばかりだよ。

005 主人公・エヴァに真実を話す（前書き）

なかなか話が前に進まないとは思いますが
今しばらくは魔法世界編となります

005 主人公・エヴァに真実を話す

S i d e ????

「おい、アル！さっきの光と見たか？！急にグレートブリッジに魔力が集まったと思ったら、今度は発光して吹き飛んじまった！」

「ナギ、私は貴方ほど目がよくありませんが、魔力が集まったことには同意しておきましょう。ただ、私にはアレが何の為に行われたのが気になります。要塞内に侵入したゼクトがやったものではないでしょうし、あのような要塞砲があつたという記録も見た覚えがありません」

「アルでもわからねーことがあるんだな。まあいいだろ？俺達の仕事はグレートブリッジをヘラス帝国の手から解放することだ。そういつた詮索は上の方の奴らに任せて、さっさと突撃しようぜ！」

「ナギ・・・貴方もラカンが来てからより一層脳筋になったというか、なんというか。ん？ところで詠春とラカンの姿が見えませんが・・・」

「ラカンならとつくの昔に突っ込んで行ったぞ？具体的に言えば、要塞に魔力が集まりだした頃だな。詠春は・・・ああ、詠春はそこで鍋食ってるぞ？前に鍋が消し飛んだのがよっぽど堪えたらしいな」
「詠春・・・それは兎も角、ラカンが危ないかもしれせん。あれだけの魔力を集めたのが人とは思いたくはありませんが、恐らく何者かがやったことには違いないでしょう」

「はっ、つまりは助けにいけてことだろ？アル、遅れずに付いて来・・・詠春！独りで鍋なんか食ってないでさっさと行くぞ！」

「やれやれ、紅き翼アラルプラの記念すべき戦いとなるはずでしたが、些か問題があるようですね。って、ナギ、私を置いていかないでください！」

S i d e セイバー

「おい、セイバー。追手だ、数は一人。単独で此処まで追ってこれる奴だ、油断するなよ」

「紅き翼アラルプラの面々の内の誰かだろうな。単純に考えると、機動力からナギ・スプリングフィールドが追ってきたと考えていいのだが・・・

「その名は確かリーダーの名ではなかったか？普通は組織の長が単独行動するとは考えられんが・・・もつと脳筋みたいな奴がいるんじゃないのか」

「エヴァの言うとおりならば、相手はジャック・ラカンになるが、さてどうなるかな？個人的にはナギ・スプリングフィールドのが勝手がいいが、どの道殺せないことには変わりない」

「殺せない、か。あの技を使えば一瞬で決着が付くとは思うが、それでも尚殺せないというのか」

「制約といった類で奴らを殺すことはできんだよ。これについても後で説明する。今は・・・ふむ、追いつかれたか」

私達を追ってきたのは、ジャック・ラカン。

エヴァの言うとおりになったというわけか。

彼とは些か相性が悪いな。

対魔力の関係上、ナギ・スプリングフィールドに対しては優勢に事が運べる筈だが、ジャック・ラカンは近接の魔力とは関係のない純粹な殴り合いになる。

魔法戦闘であれば適当にあしらって逃げ出せばいいが、近接戦闘であればそうはいかない。

殺すという選択肢が取ればいいのだが、取れないのだから性質が悪い。

ふむ、腕の1本や2本を奪って逃げるとするか？

まあ何であれ、被害を与えずには撤退させてくれないだろう。

いや、待てよ？ 奴は脳筋で、メセンブリーナ連合の諸事情には疎いはずだ。つまり……

「やつと追いついたぜ。なあ、お前がああの要塞を打ち壊したんだろ？」

「確かにその通りだが、どうして君が、ジャック・ラカンがここにいるのだ？ 君達紅き翼はグレートブリッジ攻略作戦の戦略予備として配置されていたはずだが」

「はっ、やつぱりか。こりゃ、ナギが来る前に俺が相手しないと。最近奴とばかりで鍛錬してて、いい加減飽き飽きしてきたところなんだよ」

「……？ つまりは、君はメセンブリーナ連合を裏切ると、そういうことでもいいのか？ 正気のまま同士討ちを始めるなど、利敵行為以外に他ならない」

「ん？ なんだ？ それだとお前がメセンブリーナ連合の味方のように聞こえるが、お前はヘラス帝国の人だろう？」

「なるほど、そういう誤解か。生憎だがジャック・ラカン、私はメセンブリーナ連合の味方だよ。今回、メガロメセンブリア元老院議員であるマクギル様の密命を受けて要塞破壊を行ったのだ。まあ、正規の指令でない故に、君が知らなくても無理はないが……」

「元老院議員様の密命ねえ・・・本当だろうな？お前がやった要塞破壊のせいで連合側の正規兵にも負傷者が出ているんだが」

真偽半々と言ったところか。

後はどう弁明するかで、ジャック・ラカンと戦闘になるか否かが変わってくるが。

（セイバー、貴様よくまあ、いけしゃあしゃあと嘘が吐けるものだな）

（嘘も方便と、そういうだろう？ま、この場を切り抜ける為の策だ。成功すれば良し、失敗すれば結局は戦闘となるが、何もしないよりはマシだろう）

（ふん、だがそれは馬鹿相手に通用する方便だろう？この後の話で嘘などついても私には丸わかりだからな！）

（ああ、わかつていさ。エヴァには私のことは丸わかりだなんていうことくらいね）

エヴァとの密談もそこに、さて、ジャック・ラカンにどう話を切り出すか。

「む、それは確認していなかった。恐らくは連中が要塞内に設置した妙な魔法炉のせいだろう。私の受けた密命は・・・ここでは言えないな。すまないが、その件に関してはマクギル様にお伺いを立ててからの話となる」

「魔法炉だと？なら、そいつを破壊して味方に被害を出したっていうのかよ。敵方への破壊仕事を仕掛けておいて友軍の戦力を削るだなんて世話がないな」

「怒りは御尤もだが、貴殿もそろそろ要塞戦に参加した方がよろしいのではないかな？武勲を立てるには、まさに混乱の坩堝にある今こそが好機かと思われるが」

「気に食わねえが、今は仕方ないか。ま、この御礼は後々に取っておくから、覚えておけよ？」

「御手柔らかに、とだけ言っておきましょう」

ジャック・ラカンは去って行ったか。

ふむ、以外に物わかりがよかった。実はそれほど脳筋ではないと、そういうことかな。

（セイバー、考えるのは後にして今はさっさと退くぞ。此処に留まっ
つていてはまた誰かに見つかるかもしれん）

（それはそうだな。それにしてもエヴァ、影から話すのは良いが、
もう周囲に誰もいないのだ小声で会話する必要はあるまい）

（・・・気づいてないのか。ま、それについては後で説明してやる。
今はさっさと退くことだな）

（了解）

S i d e エ ヴ ア

グレートブリッジから一昼夜かけて撤退した。

私は要塞からほどほどに離れた場所まで行けば十分だと思っていた
のだが、セイバーが頑なにもっと距離を稼ぐと言ったのだ。

ま、私にも奴に何を聞くか考える時間が必要があったから都合が
いいと言えば都合が良かったが。

彼此、此処に留まって数時間が経過しようとしている。

何から話そうか考えているのか、セイバーはずっと思案顔だ。

私としても急かすつもりはない。待つだけでより深いところまで知

れるというのであれば、それはそれで意味があるし、何より待つのはもう慣れた。

一体どこから、何を話してくれるというのだろうか。

奴と出会ってから数十年を共にしたが、奴の過去を聞いたことも探ったこともない。

興味はあるが、探るのは無粋であるし、いつかは奴自身から聞けるとそう思っていたからだ。

それが、今日になるとは思ってもいなかったが。

「・・・エヴァには話さねばならないことが多くてどこから話せばいいかわからない。故に、最初から全て話をする方が良いと判断したが、それでいいかな？」

「多い分には別に構わん。私とセイバーは経た年数の割には互いに知ることは少ないからな。好きに話せ」

「ふむ、ならば最初から話をしていこうか。まず最初に、私は不老不死だとエヴァに告げたが、実は既に一度死んでいるのだ」

「私は死んで、そして甦った。不老不死は甦ったときに得たものだ。あの甲冑も、この剣も、そしてこの姿も、全て甦って得たものだ。

私自身だと誇らしげに語れるものは、願いくらいしかない」

「君は当然問うだろう。どうして甦ったのだと。これについては些か滑稽な話に聞こえるかもしれないが、神様に甦らせて貰ったのだ。神様などという存在は、エヴァとしては憎悪の対象でしかないかもしれないがね」

「だが、私にはどうしても叶えたい願いがあった。それを叶える為に、神様と契約して一度死んだ身でありながら甦った」

「願いとは、平々凡々な日常を味わう、そんな刹那を永遠に味わい続けたいということ。その願いを叶える為に、神様から代償として1000人の魂を捧げることを提案され、受諾したのだ。先に言った、甲冑も剣も、全てはこの時に神様から貰ったものだ」

なるほど。

以前セイバーが言っていた魂についての件は理解できた。

魔法世界で戦争が起こっている間に態々グレートブリッジに来た理由はこれが理由か。

戦時中であれば、1000人の魂など容易に集めることができる。平時に1000人を殺すのは問題が生じるが、戦時であれば問題ない、そう判断したからか。

まあ、奴の持つ力については問うまい。

私自身、不老不死は真祖の吸血鬼となつてから得たものだ。

奴は願つて与えられ、私は願わずとも与えられたといった点は違うが、自前のものではないということと同じだな。

「神様の提案についてだが、若干の制約があつた。一つは殺しすぎないこと。とはいっても、1000人程度と言っていたし、倍ほどにならないければ問題がないとは思っている」

「また、世界に存在する主要人物は殺してはならないという制約もある」

「例えば、先日交戦状態に陥りそうになつたジャック・ラカン。紅^アき翼^{ラルブラ}の面々は勿論のこと、彼らの敵となる完全なる世界^{コスモエンテレケイア}についても同様だ。」

「ちなみに、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。エヴァもその一人だ」

「つまりは、私が君と初めて出会ったときに名前を知っていたのは有名であつたからではなく、既に知っていたということだ」

「ああ、何故知っているかについて話していなかつたね。知っている理由は、それも神様に資料として渡されたからだ。これを見てよく学べ、そのような感じてね」

「はは、ははははは！」

「なんだと、では知らなかったのは私だけだというのか！」

「貴様は私について知っていながら、私だけが貴様について知らなかったと！」

「道理で真祖の吸血鬼を聞いても物怖じしないわけか。」

「いや、知っているからと言え、物怖じしないという訳でないか。」

「なら、これは奴の天性とでもいうべきか？」

「というよりは、単に興味がないだけともいえるかもしれんが。」

「なるほど、なるほどな、よくわかったよセイバー。私は貴様について何も知らなかったのに対し、貴様は私について十二分に知っていたと、そういうことなんだな？」

「一体何故エヴァが怒っているのか私にはわからないが、そういうことになる。ああ、そういえばまだエヴァに話すことがあったな。」

「いつてもこのことについては私も先ほど確証を得たばかりだが」

「ははは、なんだ言ってみる。私は今気分が良いからな、思わず手が出てしまいかもしれんが気にするな。まったく、人の気も知らないで……。」

「……？まあいいか。さて、エヴァにする話についてだが、約束エされた勝利の剣、あれは魔力消費量が激しい。それについてはエヴァも理解できるだろう。」

「ふん、当然だ。というより、あれだけの破壊力を有しておきながら魔力消費がなかったら有り得んだろう。」

「実はこの魔力を消費するという点がネックで、どうやら魔力を消費すればするほど、私の対魔力値が低下するようだ。ジャック・ラカンと遭遇後、何者かにつけられたのはこれが理由だな。エヴァも追手の存在には気が付いていたのだろう？」

「対魔力値が下がり、追尾魔法の影響を若干でも受けたと、そういうことか。それで、魔力がある程度戻るまで逃走し続けたと」

「そういうことだ。これは単純に考えれば弱点にしかならないこと

だが、この状態であればエヴァとも純粹に模擬戦闘が出来るというわけだ」

ふん、だからなんだというのだ。

セイバーが魔力を使えば使うほど、対魔力が下がるだと？

そんなものは奴の言うとおり、ただの弱点にしかならん話だ。

魔力を使えば使うほど、魔法の影響を受け・・・

魔法の影響を受けるだと？！

なるほど、つまりは・・・

「おい、セイバー。確認するが、魔力を消耗した状態であるならば十分に魔法が通用すると、そういうことでもいいんだな？」

「十分かどうかは試してみないとわからないが、魔法が通るようになることは確実だな。少なくとも問答無用で打ち消すなどと、そういうたことにはなるまい」

「それだけ聞ければ十分だ。セイバー、私には少しやる事ができた。数時間程度ここから離れている。それと、その間に十分魔力を消耗させるのだ。そうだな・・・約束された勝利の剣を三発くらい無駄打ちでもしてこい。決して魔力を消耗させるまで戻ってくるなよ？」

「何やら嫌な予感がするが、指示に従おう。よくよく考えれば、エヴァが先ほど不機嫌だったのは、私が隠し事をしていたからに違いないだろうからな。失点分は取り戻しておかなくては」

「今更気が付いても遅いわ！ほら、さっさとここを離れる！」

奴には一度しつかりと教育する必要があるかもしれんな。

こう、私に対しての対応が御座成り過ぎる。

かと言って、私に対して配慮しているような時もあるから余計に性質が悪い。

ま、それも兼ねて今から罨を張るのだ。

魔力を消耗した状態なら魔法が通る。

つまり、この状態であるならば本契約が成立するということだ。
これでもはや逃れられん。

私は一度手に入れたものを易々と手放したりはしないからな。

その為に、まずはここに魔法陣を描かなくては。

セイバーがここに戻ってきた際に、瞬時に発動するように。

些か強引な手段かもしれないが、これは今まで私を放置してきた罰だな。

信賞必罰は当然のこと・・・いや、これでは罰にはならんか？

まあいい、どちらにしろ私に損はないのだ、あまり深く考える必要はあるまい。

ふふふ、セイバーがここに戻って来て、そして本契約が成立した時の奴の顔、すぐ見れるとはいえ、楽しみだ。

005 主人公・エヴァに真実を話す（後書き）

さて、セイバーのアーティファクトを何にしようか
順当に考えれば 勝利すべき黄金の剣
では、順当に考えなければ・・・

006 主人公・エヴァと契約す（前書き）

長らくお待たせしました

設定を除いて第六話目の投稿です

あ、評価点を加えてくれた方、ありがとうございます。
なんだかんだ言って評価されるとやる気がでますよね？

006 主人公、エヴァと契約す

Sideセイバー

「これでセイバーを罫に嵌める準備は整った」

「奴は基本的に魔法には疎いから、ここに仕掛けた魔法陣には気が付けない」

「問題は如何にして奴を魔法陣の上まで誘き寄せるか」

「ま、これについては私が魔法陣の中央で倒れていれば十分か」

「きつと奴のことだ、私の心配して何の警戒も抱かずに近づいてくるに違いない」

「そして私を介抱したその時に・・・」

「ふふふ、まだ奴は戻ってきてはいないが、罫に嵌った奴の顔が目に見えかぶ」

「さて、後は魔法陣の中央で奴を待つだけだな」

これは不味い時に戻ってきたか。

まさか、エヴァが独り言を言いながら罫にかかるのを待っているとは・・・もしかこれも罫か？

先の独り言に信憑性があるならば、エヴァが魔力を消費しろと言ったのは本契約バクティオーの為ということになるが。

確かに、エヴァを中心にして本契約バクティオーの為の魔法陣が描かれているから、彼女の独り言はまさに真実。

やれやれ、一体どうしてこんなことに。

さて、何故なつたかは兎も角、私はどうすべきか。

エヴァが私と本契約を望んでいるのは確かに嬉しい話だ。

嬉しい話ではあるが、このような騙し討ちを行って本契約を行うというのはどうだろう。

別に罠でなくとも私は賛同したのだが、エヴァにはそうしなくてはならない何かがあつたのだろうか。

これも彼女なりの愛、愛故だと思つていいのか？

ふむ、なるほど、愛故か。

ならば私もエヴァに対して愛を示す必要があるな。

幸いエヴァは魔法陣の中央で誘いを掛けているだけだ。

こちらの様子には気づいてはいるが、騙し討ちをする以上表立って動けるはずがない。

つまり、今ならエヴァに対して何か仕掛けることができる。

さて、何をすべきか。

といつても私にできることと言えば一つしかないか。

先ほどエヴァが話していたことに一つ間違いがある。

私にはこの世界の魔法の心得がない為、魔法を用いて何かすることはできない。

が、魔法が使えないからといって魔法に対する知識がないわけではない。

魔法陣を見て本契約の為の魔法陣と気が付いたように、魔法に対する知識は十二分にある。

故に、私がエヴァに対して行えることは・・・この魔法陣を書き換えること。

現状はエヴァが主となる魔法陣となっているようだが、これを書き換えて私が主となるようにすればいい。

本契約を望んでいるのなら、彼女からではなく私からであつたほう

が想いが伝わっていいだろう。

気の強い彼女のことだ。それはそれで文句を言うかもしれないが、エヴァの願い自体は叶うのだ不満はあるまい。

ま、問題は本契約が成功するか否かといったことだ。

エヴァに言われた通りに、約束された勝利の剣を振るって来たが、エクスカリバー一向に魔力が尽きる気配がない。

これは、限りなく膨大に魔力を有しているか、もしくは、力の由来的に私が英霊に、神様をマスターに、ということだろうか？

瞬時に魔力が再び満ちるといっわけではないから問題はないが、何れ解明してみたい疑問ではある。

さて、それは兎も角、今はエヴァを嵌める準備をしなくてはな。確か此処の魔法陣を・・・

Sideエヴァ

ぐぬぬぬ・・・おのれ、セイバー何をしている！

私が意識を失った振りをして倒れているのだ、さっさと介抱しに来るべきではないのか！

にもかかわらず、私の周囲を歩き回るだけなど・・・一体何を警戒しているのだ。

「ふむ、どうやらエヴァを餌にした罠というわけではなさそうだな、周囲に人の気配もない。ただ、若干この場を漂っている魔力が気に

なると言えば気になるが・・・まあ、大したものではないか？」

ははは、そつだ貴様の認識はそれでいい。

私を餌に手薬煉を引いて待っているのは私だ。

敵がないという認識は正しい、が、罨と言えば罨か。

ほら、私はもう待ちくたびれたのだ、早く私の下まで来い。

「さて、エヴァの様子は・・・寝ているだけか？特に外傷は見当たらないが、エヴァがこんな場所で無防備に寝ると言うのは些か腑に落ちぬところだが、起こして聞けばいいか」

「いや、存外、純粹に寝ているだけかもしれん。歳は取り過ぎたが外見は幼女のまま、たまには外見相応の行いをすると言うわけかな？」

よりもよつてこの私を餓鬼扱いとは！

しかも、場所も選ばずに眠り呆ける餓鬼扱いなどと・・・セイバー、後で覚えておれよ。

「とりあえず、エヴァをこのままにしておくわけにもいかないな。背負う・・・ふむ、背負う方が楽ではあるが、起きた時に文句を言われるかもしれんか。ここは普通に抱きかかえるのが吉だな」

その判断は正しいぞ、セイバー。

大体、私を餓鬼扱いすれば私の逆鱗に触れるようなものなのに、よくもまあそつ仕掛けてくるものだな。

「では、少々失礼して・・・意外に軽いか？まあ、ここも大して大きくなくていい、成長しないのだから当然とも言えるだろうが」

貴様どこを見て発言している！

というか、不老不死であるのに成長するわけがないだろう！

まあいい、この件についても後でまとめて制裁すればいいだろう。

今は、機を見計らって奴に本契約を仕掛けることが最優先だからな。^{バクティオー}

「一先ず、最寄の街を目指すとするか。現時刻は昼過ぎ、夜間の行動はエヴァがいつ目を覚ますかわからない以上敬遠すべきだ。エヴァ、寝てて聞こえていないかもしれないが・・・口は閉じているよ？舌を嚙んでも直ぐに治るとはいえ、無駄に痛みを負う必要もないだろうからな」

はっ？ちよつと待て！

どうしてそんなに急いで街に向かう必要があるのだ！

これは拙い。このままでは私の計画が・・・ええい、儘よ！

「んっ・・・セイバー・・・」

「ん？エヴァが起きたか？いや、寝惚けているのか微睡の中であるのは間違いないな。エヴァが私の首に手を回して、これではまるで・・・むぐつ？！」

「ちうーちうー・・・ぷはあ。ははは、馬鹿めセイバー掛かったな！これで貴様はもう私のものだ！」

「・・・いや、何も言うまい。それで、態々唇から血を吸う意味はあったのかね？唇では血流が乏しく、大して吸えないと思うのだが」

「ふん、そんなものはオマケに過ぎん。肝心なのは・・・そうそう

これだこれ、この仮契約カードの為に・・・のわあー！おい、何故私が従者になっているのだ！しかも本契約ではなく仮契約などとは

！

「ほう？本契約か。^{バクティオー}なるほど、私に不意打ちの本契約をする為に今まで狸寝入りをしていたと。そういうわけなんだな？」

ぐう・・・馬鹿な、まさか私が本契約の魔法を間違えたというのか。^{バクティオー}

にも関わらず、セイバーに向かつて自信満々に、貴様は私のものだと
言ってしまったのか。

しかも予定とは違う、本契約バクティオーではなく仮契約バクティオー。

浮かれていて見誤ったか？まさかここまで見事に失敗するとは……
ん？

ん、んん？そういえば何だかおかしいな。

セイバーの奴、私が奴の首に手を回したときも、唇を奪ったときも、
一向に驚いている気配がなかったというか。

今も尚、驚くことなく淡々と私を見つめているというか。

奴は元々こんなだったか？確かに、それほど感情を表に出すような
輩ではなかったが……まさか！

「……ああ、そうだよセイバー。貴様の私に対する扱いに問題が
あつてな？そろそろ我慢の限界だということとで実力行使に出たが・
・セイバー、貴様、私が本契約バクティオーに望むことを知っていたな！これも
歴史という奴か！」

「知っていた？いや、知っていたでは誤解があるな。正確には知っ
てしまったのだ。故に、このことは歴史に記されてはおらず、私が
知りえたのもまったくの偶然だったのだよ」

「知っていたのではなく、知ってしまったと？本契約バクティオーの魔法陣の
中で私が畏を張っているのを見抜いたとでもいうのか？」

「いや、単にエヴァが畏を張るだとかどうだとか眩きながら魔法陣
を描いていたときに偶然出くわしたただけだ。そして、心優しい私は
魔法陣を書き換えて主従反転するようにし、エヴァの畏に掛かった
かのように振舞ったのだ」

ぬわああ……まさか、あの時の姿を見られていたというのか？！

一体何をしていたのだ、数時間前の私は！

時間を遡れるなら遡ってやり直したい……

「では、私の周囲をぐるぐる回っていたのは、何らかの罫があるかと警戒していたのではなく、魔法陣に細工する為だったというわけか」

「ああそうだ。なるべくエヴァに悟られないようにと慎重に行ったのだが、その様子だと気が付いてはいなかったようだね」

「・・・当然だ。私は、セイバーが魔法に疎いものだと思っていたし、何より本契約バクティオーの成功を信じて疑わなかった。常に浮ついた状態だったのだからな」

「ふむ、そのように殊勝な言動を取るエヴァを見れるなら、意外にこのような悪戯も悪くはないな。その落ち込み具合に中々に様になっっている」

「抜かせ。まあ、当初の予定とは異なるが、セイバーと仮契約バクティオーとはいえ結べたのだ、あまり文句も言えんか」

「恐らく、仮契約バクティオーとなってしまった原因は私の対魔力の影響だろう。多少は魔力を消費したとはいえ、本契約バクティオーに至るまでには消費していなかったというわけだな」

「仮契約バクティオーとはいえ、契約できただけで御の字というわけか」

恥じらいも何もかも、一周回って無我の境地にでも入ったかのような気分だ。

そのお陰とってはなんだが、セイバーの言葉にも何ら口籠ることなく話せる。

ははは、なかなか悪くない気分ではある・・・虚しいがな。

さて、過ぎたことを悔いても仕方あるまい。

というか、早く忘れたい。

悲願とまではいかないが、仮契約バクティオーが成立したのだ、今回はこれで満足しておけばいいだろう。

今、必要なのは仮契約バクティオーが成立した今どうすべきかだ。

「まず、仮契約カードのアーティファクトの確認か。」

「アテアクト
来たれ」

「エヴァのアーティファクトか。・・・とは言ったもののアーティファクトが顕現してこないな」

「私にも何かのアーティファクトが発現したようには感じない。また、アーティファクトの効果が発現したようにも・・・む？右手に妙な刻印が・・・」

「イレギュラーな私に対するアーティファクトというわけか。だが、この世界に令呪は存在しないことから、これを施したのは神様自身か？だとすれば、私がこの世界で伴侶を見つけるところまで見通していたとなる」

「伴侶、伴侶か、悪くない響きだな。それは兎も角、セイバー、私にも説明してくれ。貴様は一人合点が言ったようだが、私には何だかさっぱりわからん。この右手に刻まれた刻印、令呪とは一体なんなのだ？」

「令呪は、本来であるならば主人が従者に持つ絶対命令権だ。今回の場合は、エヴァが従者でありながら令呪を持つに至る・・・これは神様の仕業と考えていいだろう。ま、細かいことは考えず、エヴァは私に対しての絶対命令権を獲得したと思えばいい」

「絶対命令権か。聞こえは良いが、本当に絶対なのか？それと、使用に制限はあるのか？」

「絶対、とは言い切れないか。令呪自体が備える魔力、エヴァの魔力、そして私の魔力で賄える範囲であれば、願いが叶う程度には絶対だ。とは言っても、私の魔力供給源はどうやら神様からのようだから、実際には出来ないことはないと思われる。エヴァが地球を割りたいと令呪を持って命ずれば用意に行えるほどにはね」

「セイバーの言を鑑みるに、セイバーを介して膨大な魔力の行使が可能というわけか。それにしても大地を割れるとはな・・・有り得

んスケールの力だが、問題は回数だ」

「行使できる回数は、恐らくは3回までのはずだ。これについては私も知識としては持っているが使ったことはないので推定に過ぎんがね。まあ、世界を三度も壊すことが出来ると考えれば、それだけでも大きすぎる且つ多すぎると思うが」

三回限りのアーティファクトか。

いや、アーティファクトですらない。

むしろこれはセイバーの宝具に近い性能を誇っている。

回数制限があるとはいえ、実質セイバーを介せば願いが叶うといっても良い訳なのだから。

些か、不可解な手順だとはいえ宝具といっても過言ではあるまい。

「とは言っても、恒久的な願いには効果は薄いがね。逆に即時的な願いに関しては効果が高い。故に、平時においては使わず、窮地を切り抜けるための切り札として用いるのがいいだろう」

「では、私がセイバーとずっと一緒に居たいと願ったらどうなるのだ？その言に従えば、良くて基本的には一緒にいる程度、悪くて効果が発現しない。そのように採れるのだが？」

「離れることができない、ということはないだろう。だが、離れ続けることもできないというか・・・選択肢においてエヴァと行動を共にするという条件が優先されるとか、その程度ではないか？」

「なるほど、それはいいことを聞いた。つまり、浮気はするなど呪いを持って命じておけば、積極的に浮気はされないと・・・そういうことだな？」

まあ、そんなことを令呪を用いて命ずることはしないがな。

私もセイバーも互いに不老不死、朽ちることは無く永遠は既に約束されている。

私は兎も角、もしかするとセイバーが他人に現を抜かすこともある

かもしれない。

それはそれで腹立たしいことではあるが、永遠を約束されている以上は目くじらを立てるほどではないか。

どれほど迂遠な道を辿ろうとも、最後には私の下に彼は来てくれるのだから。

「どうしたエヴァ、なんだか嬉しそうだな？先ほどは羞恥一色だったが、今は至福に包まれているようではないか。一体この短時間でどんな心変わりをしたのだ？」

「なに、焦る必要はないと理解しただけだ。私も貴様も永遠の時間があるのだからそう焦る必要はないと、そう思っただけだ」

「永遠か・・・ああ、一つ言い忘れていたかな？私はある程度の周期を経て別の世界に行くぞ？それがいつになるのかは神様次第だが、ノルマを達成してあるから存外早くその時が訪れるかもしれないな」

「はあ？！なんだそれは！そんなことは聞いていなかったぞ！」

「言っていないかった気がするから当然のことだな。いや、言ったよ
うな気もしないでもないか？」

「いいや、絶対に言っていないかった！こうなったら貴様がいなくなるまでの間、盛大に扱き使って・・・いや、令呪を持って命ずるのもありか。おい、セイバーどこへ行くこうとしている！」

馬鹿め、私が逃がすと思うなよ？

折角あんな恥ずかしい思いをしてまで捕まえたのだ、逃がすわけがあるまい。

だが、問題は奴が別の世界に行くという話。

出来得るなら、令呪でもなんでも使って避けられるなら、それを阻止する。

阻止出来ぬのであれば、奴に付いていくか。

だが、それも出来ぬのであれば・・・

思い出として残す以外に他にはないというのだろうか。

006 主人公・エヴァと契約す（後書き）

最初はセイバーにアーティファクトとしてカリバーンを持たせようと考えていました。

しかし、発想を逆転させて考えると、エヴァに令呪を持たせた方が面白いかな？と思い実行に至ったわけであります。

この先、エヴァが令呪を使うかは兎も角、この主従関係はなかなか面白いものになると思いますよ？

Sideセイバー

若干想定とは異なったが、予定通りエヴァと仮契約を結んだ私達は、戦火から逃れるために・・・というのは口実で、今後の行動計画を練るために連合側首都メガロメセンブリアに向かった。

仮契約は妙手だったのだが、【世界を渡り歩く】という隠し事をしていた為にプラスどころかマイナス域までエヴァの機嫌を損ねてしまったのは失策。

それに加え、エヴァの目論見を崩し、私が主でエヴァが従者という結果になったのも、エヴァの独り言を聞いていたというのも、これもまた失策。

そんな不機嫌なエヴァを連れて束の間を休息を得ようとメガロメセンブリアに向かったのだ。

現在はメガロメセンブリアにある宿の一室。

「セイバー、よもや、まだ隠し事があるとは言わないだろうか？」

「私が知っていることは・・・今此处で再び話したはずだ」

「ならば、これで全て吐き出したというわけか。ふん、世界を渡るとはな・・・それを止めることはできんだな？」

「私の仕事、役目であり、それを受け入れたが故に今がある。止めることはできないだろうし、神様も止めさせてはくれないだろう」「留めることができぬのなら、私には付いていくしか選択肢がない

のだが・・・それも出来ぬなら、私はこの若さで未亡人となることに」
「未亡人も何も、そんな関係で・・・軽率な発言だったな。だから、その首に掛かっている手を離してくれないか？爪が食い込んで痛いのだよ」

「貴様は一々私の癪に障る発言を！で、どうなのだ！」

「エヴァが私に付いてこれる可能性か。これについては十二分にあるといえる。根拠としては、やはり令呪の存在だろう。この世界には無いものがエヴァに発現したのだ、何らかの理由があると見ていい」

「セイバーの言う神が与えたという話か。もしそれが本当であれば、その神を崇めてもいいと、そう思えるな」

希望的観測に過ぎないと言われるかもしれないが、あの神様は愉快犯的存在ではあるまい。

世界を管理する、と言いついで正しいのか分からないが、彼は管理すると言つことに關しては厳密だった。

むしろ不安分子を排除し、世界の安定化に努めるといふ選択肢を取つていたはずだ。

此処から察するに、エヴァに令呪を与えることや本契約パクティオーすることは世界に対して影響を与えないと判断しているに違いない。

推測に推測を重ねるといふ、信憑性のない話となってしまったが、勘では正しいと思う。

普通に考えて、意味もなく不安要素を増やすだなんてことはしないだろう？

ならば、これも何かの意味があると考えた方が流れに沿っている。彼が、神様が愉快犯的存在でなければ、という前提がいるがね。

「それで、希望的観測とはいえ、私に付いてこれると判断したのなら今後はどう動くか。私としては、平穩無事に、つまり戦禍とは離れ、歴史から離れて過ごしていたいのだが・・・」

「まさかセイバー、貴様だけ目的を果たしておきながら、私の願いを無視するだとか・・・そんなことは言わないだろう？」

「やれやれ、つまりは歴史通りに進みたいということか？歴史通りに進むのであれば先ほど説明したように・・・麻帆良学園で警備員の真似事をするようになるぞ？」

「誰が歴史をそのままなぞると言った！貴様が関わることで多少の変異は生じるとはいえ、歴史の大筋は変わらないだろう？」

「歴史の大筋を愉しみつつも、俘虜になるような事態は避けると、そういうことか。欲張りというか、なんとというか・・・どうして、エヴァはそうしたいのだ？何か理由があるのか？」

「理由だと？それはセイバーの願いに反するからに決まっているだろう！貴様に付き添って此処まで来たのだ、これからは私に付き従ってもらおう。・・・それに、思い出となるならば、なるべく派手な方がいいだろう」

なるほど、エヴァは私に付いてこれない未来も十分に想定していると、そういうことか。

ならば、異論を唱えることもなく賛成するしかあるまい。

私としては、平穩無事、物語の大筋から外れた生活を送った方が手間が掛からずに好きだったのだが・・・これもエヴァと出会ったが故の運命か、諦めは肝心だな。

「となれば、絶対に通過する必要があるのはマクギル元老院議員の件についてだな。ジャック・ラカンと出会った時に口実としてマクギル議員の話を出してしまった」

「^{アラルブラ}紅き翼と敵対関係になれば大筋に関われなくなるということか。

だが、別にそれは無視してもいいのではないか？どうせなら夜の迷

宮で姫様方を救ってやった方が都合がいいだろう？」

「ふむ。姫様方救出の褒美としてエヴァの賞金首取り下げも期待できるな。確かに、その方が勝手が良さそうだ。ただ、万が一に救出のタイミングが重なった際、アラルプラ紅き翼との戦闘が避けられそうにもないのが問題だな」

「成功すればアラルプラ紅き翼と同行、世界を救う悪の魔法使いと言ったところか？だが、そこまで同行するとアリカ姫の代わりに私達が晒し者として処刑を受ける目に合いそうだな。格好の、ふふ、スケープゴートとはこのことだ」

「以前のエヴァなら兎も角、現状のエヴァは私経由で魔力供給を受けることができる。故にケルベラス溪谷といえども何ら障害にはならんが・・・利用される、エヴァの癩に障りそうなことだな」

面倒を避けるのであればマクギル議員の件は処理しておかなくてはならない。

無視して進めば、私とエヴァは見事に完全なる世界コスモエンテレケイアの仲間入りだ。事實はどうであれ、そう認識されると面倒としか言えん。

となれば、夜の迷宮で姫様方を救う必要が確実にある。

姫様方を解放することにより、コスモエンテレケイア完全なる世界とは関係がないことを証明できる。

もしくは、騙されていたと称する事もできるか。

だが、その後彼らに同行するというのはどうだろうか？

如何なる大義名分があるとはいえ、戦争に参与するということで悪名を背負うのは確実。

ただでさえ闇の福音と呼ばれ、しかも賞金首となっているのだ。

アラルプラ紅き翼が名実共に英雄の称号を、犠牲者の憎悪は我々が引き受けるに決まっている。

この大戦争で被害者がでないというのであれば、話は別だがね。

仮に、それでも付いて行くとしたら、どこまで同行すべきか。

どの道不利益を蒙るのであれば、最も不利益が少なくなる時期がよい。

つまりは、造物主が倒され、凱旋式が行われた後に抜けるのが最善か。

それ以降になればオスティア崩落に巻き込まれ、崩落原因が我々のせいだと疑われかねない。

いや、我々のせいになる。

エヴァの言うとおり、格好のスケープゴートに違いないからな。

「どうやらセイバーは紅き翼アラルブラに同行するのが不満なようだな？別に心配する必要はない。貴様の語った歴史の様に、私がナギ・スプリングフィールドに心奪われるということは有り得んからな」

「・・・出来得るなら、エヴァに手を下させたくないだけだ。望んで戦禍に飛び込むなど、正気の沙汰ではないだろう？理由があるのなら兎も角、好き好んでいく場所ではあるまい」

「そういつつも、貴様の都合で戦禍に巻き込まれたのだが？ならばどうするのだ。紅き翼アラルブラに同行しないというのなら、一体どうやって歴史の大筋に関わるのだ？」

「戦禍に関わらず、それでも尚歴史の大筋に関与するか。ふむ、ならば魔法世界を退去して、麻帆良学園に向かうというのはどうかな？」

「アホか！麻帆良学園などに向かったら、それこそその場で戦争ではないか！貴様は兎も角、私は吸血鬼の真祖で賞金首だぞ！メガロメセンブリアの軍勢が・・・！」

「類稀なる大分烈戦争中に、旧世界の麻帆良学園を防衛するのにどれほどの戦力が送れるのか。些か楽観的かもしれないが、そうそう送れるものではあるまい？」

「なるほどな、確かに今ならばメガロメセンブリアからの増援は無

視できるだろう。だが、麻帆良学園には学園結界が張られているぞ？あの中に入ってしまったえば、私も容易に動くことはできん。鴨がネギ背負って行くようなものではないか」

「魔力は私から供給し、エヴァには全て遠き理想郷を持つてもらえば問題ないだろう。対魔力の関係上、私には学園結界の効果など発揮されぬはずだからな。．．．あまりの効果に治癒魔法も無効化するの難点だが」

「神楽坂明日菜が持つ魔法無効化能力、その完全上位互換。実に優秀ではないか．．．ん？ならば貴様はどうやって今まで浮いていたのだ？魔法世界に来てから、私と宙を飛び回っていたような気がするのだが」

「インビジュアル・エア風王結界とあるように、風は私の専売なのだ。宙を舞うなど、造作もない」

「貴様から貰った資料から察するに、元々はそんな能力はなかったかのように感じるのだが．．．まあいい、話が逸れた。それで、麻帆良学園に向かってどうするのだ？」

「何もしない。ただ、そこに居座っていればいいだろう。どうせ実力では私達を排除することは出来ないのだ、そこで時が来るまで居座っていればいい」

「時が来るまで居座るか．．．確かにそれでもいいが、そうであるならその案に追加修正だな。どうせなら、夜の迷宮で姫様方を救出してから麻帆良学園に向かうのはどうだ？」

「というと？」

「察しているとは思いますが、姫様方を救出することで私達が敵でないことを証明すること。コスモエンテレケイア完全なる世界をいう黒幕を察知し、マクギル元老院議員に接触していたこと。コスモエンテレケイア完全なる世界によって牛耳られていると思われるメガロメセンブリア元老院から、旧世界の世界樹を護ると称して麻帆良学園に向かうこと。こんなところだな」

エヴァが語ったのは三点か。

一つは、最初に話したように姫様方を救出すること。
紅き翼アラルプラが持つ我々の完全なる世界コスモエンテレケイアに関与するという嫌疑を目に見える形で排除できるいい手だ。

アリカ王女とテオドラ第三皇女の力を以ってエヴァに掛かっている懸賞金を取り下げてもらえることもさながら、紅き翼アラルプラと友好的になれるということには利点がある。

後の麻帆良学園には、アルビレオ・イマヤタカミチ・T・高畑が在籍する。

麻帆良占領時は兎も角、彼らが学園に滞在する間には多少の確執は消えることになるだろう。

二つ目は、紅き翼アラルプラに対する釈明だな。

単純に、我々は完全なる世界コスモエンテレケイアに関与しているわけではなく、以前より黒幕の存在を疑っており、マクギル議員に接触したということ。
紅き翼アラルプラが反逆罪に問われたことで、蚊帳の外であった私達にも完全コスモエンテレケイアなる世界の存在が真なるものと判断できた。

理由付けとしてはこんなところか？

問われるとすれば、「悪の魔法使いが、何故完全なる世界コスモエンテレケイアに味方せず、紅き翼アラルプラに味方するのだ？」というところだが、脳筋でない限りこんな問いはしてこないか。

三つ目は、麻帆良学園へ向かう口実だな。

とはいっても、現地では何も言わず不法滞在、事が済み次第理由を伝えればいい。

夜の迷宮時点では紅き翼アラルプラは今だ反逆者、完全なる世界コスモエンテレケイアの件が片付いてからでないかと正統な理由にならん。

紅き翼アラルプラから頼まれたとでも言えば不満も出まい。

・・・うまく行くかはわからんが、いい手であるのは間違いないか。

それでも問題があるのであれば、ケルベラス溪谷終了後、青山詠春を頼っていけばいいか。

京都行きにうまく同伴して、鬼神退治に参加すれば滞在くらいの許可は出るだろう。

後は滞在中に程よく良好な関係を築き、近衛木乃香の護衛役、桜咲刹那の指南役でも請け負って麻帆良に向かえばいい。

「・・・推考してみたが、エヴァのその案が良さそうだな。利点が多い割にデメリットが少ない、選択すべき行動だろう。失敗したときは紅き翼アラルツラの一員である青山詠春を頼ればいい」

「青山詠春か。会ったことは無いが、話に聞く限りは問題なさそうだな。それに、奴の本拠地が関西で、且つ京都だというのは実に良い。なあセイバー、いつその事、住居を清水寺に・・・」

「青山詠春の本拠地も由緒ある歴史構造物だ、清水寺を住居空間にはしないでくれ。頻繁に訪れることが出来るだけで十分だろう?」

「むう・・・仕方ないか。使用人共がいなくては清水寺を管理することは難しいからな、ここはセイバーの言に従っておこう」

どうやら決まったようだな。

可能なら麻帆良学園に滞在、占拠。

とはいっても、歴史通り、麻帆良学園の敷地内にログハウスを作る程度で交戦の意図はまったくないつもりだ。

それが何らかの理由で不可能であった場合は、青山詠春を頼って麻帆良学園に向かう手段を取る。

こちらの方が簡単か?

エヴァも京都に居住空間を作る気満々だったからな・・・山奥の小屋にいつまでも滞在しているわけにはいかないか。

「さて、話は終わりだな。小難しい話も終わり、後はプライベートな時間だ」

「ん？どうしたエヴァ、ベットに寝転がって、しかも手招きをする
だなんて」

「男女が一組、寝室にて。仮契約パクティオーも終えているし、相思相愛でもある。言わずとも知れたことだろう？」

008 主人公 夜の迷宮へ向かう

S i d e エヴァ

セイバーと今後の方針を決めた後、夜の迷宮で事が起きるまでメガロメセンブリアの宿に滞在した。

流石に数ヶ月も宿に滞在すると告げると店主は引きつった顔をしたが、前金で割り増しで支払ってやるとニコニコ顔で去っていったなまったく、現金な奴とはこのことか。

数ヶ月の間メガロメセンブリアに滞在したものの、結局この間、街を出歩いたりなどはしなかった。

一応、変装術を用いて姿形を変えているとはいえ、バレてしまえば面倒になるからな。

こういう時、賞金首というのはもどかしい部分がある。その代わりといってはなんだが、セイバーと十分に愛が育めた気がする。

少なくとも数ヶ月前よりは奴も感情的になっただし、これはこれで良かったとも言えるか。

「エヴァ、何を考えているのだ？」

「新婚旅行はどこに行くべきかと思って、な。私とセイバーがそういう関係になって数ヶ月経たわけだが、宿に籠ってばかり。やはり、向かうのは京都が妥当か。日本各地の城を観光に行くのも悪くないな」

「・・・姫様方はこの先だ。これまでのところ誰にも見つかつては
いないが、^{アラルプラ}紅き翼の連中が着次第、交戦になることも考えられる。
遅れを取ることはあるまいが、気を抜くなよ」

「やれやれ、真面目な奴だ。つと、侵入前に設置した探査結果に反
応があつた。恐らく^{アラルプラ}紅き翼だろう。これは面倒なことになりそうだ
な」

「扉の解呪をする暇もないか。姫様方の救出だけなら兎も角、説明
も必要であるのだからな。ここは強行突破が最良、エヴァ、扉付近
に姫様方はいるのか？」

「扉から十分に離れた位置に生体反応。問題ない・・・つと、既に
終えているではないか」

セイバーが^{ストライク・エア}風王鉄槌で扉を叩き壊す。

特に強化もされていない扉だったのか、一撃で粉碎され木片が宙に
舞う。

というか、木造で且つ魔法強化も何も施されていないのであれば容
易に脱出できたのではないか？

まあ、脱出できたとしても抗う術がないならそれでも十分事足りる
と言えるが。

此処から遙か後方では夜の迷宮が粉碎されるような大魔法の轟音。

私達が隠密行動を取っていたのが馬鹿らしくなるほどに各所で戦闘
が勃発しているようだ。

・・・奴ら、探し者に魔法が当たるとか、そんなことは考えもしな
いのか。

要人を連れ去るのであれば奴らは陽動となつて都合がいいが、生憎
のところ今回は交渉になる。

^{アラルプラ}紅き翼にも^{コスモエンテレイア}完全なる世界にも邪魔されずに時間を掛けて行いたかつ
たのだが・・・仕方がないか。

「セイバー、貴様はここで奴ら・・・^{アラルブラ}紅き翼と完全なる世界^{コスモエンテレケイア}の足止めをしろ。その間私は姫様方と交渉を行う」

「独りで大丈夫かね？ 姫様方が危害を加えてくるとは考えづらいが、エヴァは些か足りない部分がある。変に丸め込まれたりしたら面倒なのだが」

「ふん、たかが十数年生きた程度の奴らに私が丸め込まれるなど・・・まあないぞ？ たぶんない、だから心配するな」

「幸先不安だが、^{アラルブラ}紅き翼を止めれるのは私しかないか。魔法使い相手には私が最適。それにジャック・ラカンや青山詠春のような近接格闘系をどれだけ防げるか興味もあることだ、私が時間稼ぎをしよう」

「・・・私としてはセイバーの些か不安なのだが。こう、なんとなくか、交渉の終盤に差し掛かる前に^{アラルブラ}紅き翼に抜かれてくる様子が目に浮かぶというか」

「有り得るが、それはお互い様というものだろう。それに、私は^{アラ}紅き翼を殲滅するのではなく時間を稼ぐだけなのだ。殺傷できん以上は抜けられるのも仕方あるまい」

「何だか、手間ばかりが増えて実りが少ない気がしてきた。セイバー、これはもういつそのこと麻帆良に進駐した方が楽なんじゃないか？」

「数百年も生きてる割には面倒くさがりだな。いや、数百年も生きたからこそ面倒に感じるのか？ まあ、それは兎も角、折角ここまで来たのだ、せめてエヴァの懸賞金だけは下げて貰えるように交渉をだな・・・」

「つまり、貴様らは私達に^{ダイクエヴァンジェル}闇の福音の懸賞金を取り下げると、そう政治的取引を持ちかける為にここに来たということでもいいのか？」

阿呆セイバーめ！

貴様と長々と話していたら、姫様方が痺れを切らして出てきてしまったではないか！

とはいっても、出てきたのはアリカ姫だけで、ヘラスの姫様はこちらを窺っているだけか。

影響力があるのは、どちらかと言えばテオドラ第三皇女の方が十二分にある。

アリカ姫に影響力を期待するのは、今後の展開を考えると有り得ん話だな。

アリカ姫からクルト・ゲードルへという意味でなら最適かもしれないが。

「ふん、その通りだ。敢えて名乗る必要もないことだが、私がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。一般的には、闇の福音と言ったほうが聞こえがあるか。紅き翼アラルツラとは仲の悪そうな」

「そして、私はエヴァのマスター。いや、相方か？まあ認識は自由にしてもらって構わない。名はセイバー・マクダウエル、エヴァンジェリンは私の魔法使いミニストラ・マギの従者だ。とは言ったものの、従者と主人が逆転しているがね」

「闇の福音は聞き覚えがあるが、そちらのセイバー殿は聞き覚えがないな。いや、我が騎士の連れが言っていたか。グレートブリッジにて完全なる世界の仲間である騎士を見つけたと」

「なっ？！アリカの言うとおりなら、こやつ等は完全なる世界の仲間コスモエンテレケイアということになる。だが、完全なる世界の仲間であるならば、ここから我らを出す理由がない」

「やれやれ、既に私達は完全なる世界の仲間扱いか。コスモエンテレケイア」

「完全なる世界が救うということに疑問を抱いている以上、離反者と捉えられるのが関の山か。」

「万事が予定通りに推移しないと、悪名というのも考え物だな。」

「尤も、セイバーがジャック・ラカンに対して不用意な説明をしなけ

れば良かったのだがな。
まあ過ぎてしまったことを嘆いても仕方がない。

「（おい、セイバーどうするんだ？このままでは完全なる世界の仲間扱いだぞ）」
コスモエンテレケイア

「（弁明しても、既に手遅れだろう。それに打開する証拠もない。故に、ここは彼女らを助けるといふ手筈までとして、あちらに判断させるべきだろう）」

「（下手に言い訳をせず、態度で示すというわけか。だが、それで完全なる世界との繋がりがなくなることになるのか？）」
コスモエンテレケイア

「（少なくとも現状はないということが示せるだろう。だが困ったな、これでは麻帆良学園に向かつても敵役としか認識されぬ・・・やはり、不法占拠するしかないのか）」

「（今後の話はまた後で考えればいいだろう。今は先に奴らの相手をしてやれ。あちらから見たら無言で立ちすくんでいるようにしか見えんだ、不信に思われるぞ）」

「何とか言ったらどうなんだ？アリカの言つとおりであるならば・・・

・お、おい！ちよつと待て！私達を置いてどこへ行こうというのだ」

「この場で雄弁に語つたとしても、私達が完全なる世界の関係者でないということの証明ができません。懸賞金の取り下げ交渉ができません
コスモエンテレケイア

は残念だが、面倒ごとになるより先に去ったほうが懸命だからな」
「闇の福音ともあるうものが、不思議なことを言つものだ。既にこの行為自体が面倒ごとであろうに。テオドラも言っていたが、一体どこに行こうというのだ？」

「既に聞こえているとは思いますが、君の騎士がここへ向かっている。
アラルプラ
紅き翼と鉢合わせして交戦するのは目に見えている以上、長居は無用ということだ・・・特に、エヴァには戦闘をさせたくないからな」

「負ける、とは思っていないのだな。我が騎士が誇る、
アラルプラ
紅き翼を前

にしても、か」

嫌な予感がするな。

私達を戦力とみたか、利用価値があるものとして判断しているようだ。

懸賞金を取り下げると、こちらの要求は伝えてある。

後は姫様方が、私達がそれに見合うかどうかを見定めているといった類だな。

だが、生憎利用されるといっのは好きではないのだ。

「セイバー、行くぞ。この場でやれることは全てやったのだ、無為に時間を潰す必要もあるまい」

「ふむ、ならば疾くと去るか。だが予定が些か狂った、埋め合わせとして・・・紛争地域にでも向かうとするか？間接的にでもポイントを稼いでおきたい」

「闇の福音が紛争地域に？言うておくが、我が帝国民を傷つけでもしてみるがいい、ただでは済まさんぞ」

「ハハハハハ、テオドラ皇女は不思議なことを言う。そもそもこの戦争は種族間の紛争が元で勃発したのだ、コスモエンテレケイア完全なる世界が関与したにしろ、それは間違いあるまい」

「だからどうしたというのだ！そうだと言っても、我が帝国民を傷つけていい訳があるまい！」

「私らに言うより先に、メセンブリーナ連合にそれを言ったらどうだ？今も尚、苦しめているのは連合の奴らだと思うが・・・ああ、無為に和平を結ぶのはやめておけ。それは結局、種族間の問題は解決されないのだ」

ヘラスの姫様は優秀かと思いきやこの程度か。

帝国民を心配するのは為政者として正しいと言えるが、この戦争は理由なしにやめることは出来んと思うのだが。

確かに戦争を続けることにより嫌戦感情は増すだろう、しかし元々は種族間対立より戦争が勃発したのだ、文化発祥の地オステイアの奪還も目的とはいえ、民にとっては紛争問題解決も目的ではないのか？

つと、別にこれは私が考えてやる必要もない問題だったな。

こういったことはその立場にあるものがやればいい、それが望んでなかったかそうでないかは兎も角、今その場にいる人物がやるべきだ。

「闇の福音」ダークエヴァンジェル　そこまで知っているのなら、どうして完全なる世界打倒に力を注がないのだ？それに、紛争地域に出向いて一体何をやるというのだ」

「平時は立派な魔法使いマキステル・マキを雇っておいて、この場に及んで助力を求めるとは・・・ああ、為政者などそんなものだったな」

「紛争地域では首謀者の殺戮を行う。エヴァには殺しをさせるつもりがないので戦闘は私が、エヴァは・・・怪我人の治療を任せようか。魔法に好き嫌いせず、治癒魔法も覚えて貰わなくてはならないからな」

「なるほど、ポイントを稼ぐとはそのことか。だが、それをしても懸賞金の取り下げを行われぬと思うぞ。メガロメセンブリアが賞金首に仕立て上げたのだ、我らでは魔法世界全域に御触れを出すことはできない」

「ふむ、その有様では紛争地域に出向いたところで首謀者にされるのが関の山か。ならば今後の予定は白紙にした方がよさそうだ。エヴァ、一先ずここを去るぞ」

会話の途中、姫様方をここに置き去りにして夜の迷宮から逃走する。私はセイバーに抱きかかえられて・・・甲冑が当たって痛いが悪くはない。

もう少しレディに対する扱いを覚えてもらいたいと思うが、仕方がないか。

不器用なのも悪くない。

結局、ほとんどの目的が達成できなかったな。

私には懸賞金が掛かったまま、むしろアリカ姫達を無駄に救った為に色々と嫌疑が増えたような気がしないでもない。

慣れないことはすべきではないということか、これではあまりセイバーを馬鹿にはできない。

ともあれ、良くも悪くも印象付けはできたのだ、後はそれが良い方向へ進むように祈るだけだな。

「なあセイバー、この後は結局どうするのだ？」

「紛争地域に顔を出してみようと思う。運が良ければ龍宮真名に会えるかもしれない」

「龍宮真名か・・・敢えて問う必要もないな、私はセイバーのことを信じている」

「まるで私が浮気をするとしても言いたげな顔だな。もう少し素直に嫉妬してくれた方が、私としては愉しみがあるのだけだね」

「それはやめた。素直に嫉妬してもセイバーを喜ばせるだけだからな！こつやつて無垢に信じている振りをした方がセイバーには効果的だ」

「やれやれ、エヴァも捻くれてしまったな。昔のエヴァが愛おしい」
「よ」

009 主人公、紛争地域にて要人を救助する（前書き）

急にポイントが加速してビックリしました。

週間での更新で時間を掛けすぎだとは思いますが
それでもお付き合いしてくださる方々に感謝です。

それは兎も角、第九話です。

今回は分水嶺

選択肢は3つほど提起されていますが
選ばれるのは勿論・・・。

009 主人公、紛争地域にて要人を救助する

S i d e セイバー

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い我に従え炎の霸王 来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に 燃える天空！」

夜の迷宮を退去した後、魔法世界に多数存在する紛争地域に出向いた。

紛争地域では、種族間の対立による紛争や大分烈戦争の余波を受けた小規模な戦闘が発生しており、老若男女問わず屍の山が築かれている。

また、その過程で亜人が奴隷商人に売られたり、万病に効く妙薬の素材として体の一部を剥ぎ取られたりと不幸には事欠かない場ではあるようだ。

私とエヴァが紛争地域で主に相手をするのは直接戦争に関係のない行為を行う者達、つまりは奴隷商人の類といった者が相手となる。ヘラス帝国もメセンブリーナ連合もそれぞれに思惑があつて戦争をしているのだ、そこに介入する必要性は感じない。

どちらが正義なのか、そんなものはどちらの仲間でもない私達にはわからぬことだ。

故に直接的な戦闘には介入せず、奴隷商人のような輩を潰しまわる

という作業をしている。

「私を介することで魔力が無尽蔵になったとはいえ、些か魔力を込め過ぎではないかな？ 奴隷商人が跡形もなく燃え尽きたのは兎も角、大地を融解させるといふのは問題があると思うのだが」

「悪の魔法使いを称する私が言うのもなんだが、奴らは生きていていい部類ではない。それだけ感情がこもった一撃なのだ、大目に見てもらいたいものだ」

「だが、直接現場に来る者は所詮奴隷商人の手下に過ぎんだろう。燃やし尽くすのではなく、そこから大本を辿ればよかったのではないか？」

「阿呆。貴様が今自分で言ったではないか、先の奴は手下に過ぎないと。商品奴隷を引き渡すだけの手下が大本を知っているとは考えられんだろう」

なるほど、確かに手下からは直接大本へ辿り着くのは難しいだろう。まあそれも、奴隷の受け渡し場所を尋問し、より情報を持っている者を待ち伏せするという手段もあったのだが・・・そこまで躍起になつて潰さなくても良いか。

どの道、個人の規模で奴隷商人を潰しても無くなるということはあるまい。

こういったものは、国家規模で取り締まり防ぐしか方法はないのだ。どれほど個人が頑張ったところで目の前に居るものが救えるのが最大の成果で、目の前に居なければ助けることはできない。

私達が関与するのはこの程度で十分だろう。

「今回の成果は二人・・・いや、一人か。もう少し来るのが早ければ、彼も助けられた気がするが仕方あるまい。エヴァが治癒魔法さえ覚えていればな」

「治癒魔法は苦手だと言ったではないか。その代わりと言ってはな

んだが、氷や闇以外にも火や風の魔法を身に着けたのだ、文句はあるまい」

「そのお披露目が先の魔法というわけか。成果は素晴らしいが派手過ぎる。それに使用した魔力量も膨大過ぎる」

「みなまで言わずともわかる。正義を騙る立派な魔法使いマギステル・マギ共に見つかる前に去るといふのだろうか？」

「そういうことだ。彼女は私が運ぶから、エヴァは私の影にでも・
・なんだその顔は。どの道、エヴァには彼女は運べないだろうか？」

エヴァの言いたいことは聞かずともわかるが、仕方があるまい。

いくら彼女が、龍宮真名が現時点で小柄だとは言え、エヴァ自身も小柄なのだ。

物理的に可能であったとしても物体が大きい以上は高張る、エヴァが運ぶには少々難があるだろう。

つと、人を物扱いするのは拙かったか。

「ふん、ならば私はセイバーの邪魔をせぬよう影の中にとしよ
う。一先ずは、メガロメセンブリアの宿へ向かうのか？あそこもそ
ろそろ潮時だろう。変装魔法が暴かれぬとは言え、何れは見つかる
ぞ？」

「一先ずは、メガロメセンブリアに向かうしかないだろうな。エヴ
アの言うことは尤もだが、治療薬、食料品に衣類と、色々と手に入
りやすい場所であるのは間違いない。が、彼女が癒えた後は別の場
所を探さなくてはならないな」

「別の場所とは言っても、どこへ行くのだ。大分烈戦争も既に終盤、
墓守り人の宮殿へ攻め込むまで秒読み状態と言ったところだぞ？そ
れが終われば戦争犯罪人を祭り上げる茶番劇が始まる。今、公の場
に出ていけば恰好の餌だといふのはわかってるだろうか？」

現状の龍宮真名だが、意識は無いが身体への損傷は然程ない。

治療薬の必要も感じず、自然治癒だけでなんとかなるといった具合か。
となれば、敢えてメガロメセンブリアに戻る必要もないと判断できるが、他に向かうべき場所がない。
終戦後のことを考えれば人気のない場所が適切なのだな。

「表に出れぬのであれば、裏に向かうしかない。だが、そんな都合のいい場所をエヴァは知っているか？」

「深く考えずに旧世界へ向かえばいいではないか。私達が完全なる世界に関与しているという嫌疑が晴れぬ以上、魔法世界にいる理由がないのだからな」

「旧世界か。確かに旧世界であれば問題ないと言えるが、完全なる世界との終盤戦でゲートが解放されているとは思えん」

「なら、紅き翼アラルプラが使っていた隠れ家を利用すれば良い。今まさに英雄となるう紅き翼アラルプラが掘立小屋に住み続けているということはあるまい」

「だが、アリカ姫がメガロメセンブリア元老院に逮捕された際、紅き翼もこの掘立小屋を再度活動拠点にするのではないか？彼らも一時的に身を隠す必要はあるだろう」

「黙って聞いていれば文句ばかり言いおって！ならばどこへ向かえば良いのだ！文句があるなら対案を出せ、対案を！」

旧世界へ向かうのであれば、終戦後ゲートが開き次第向かえばいい。魔法世界へ留まるのであれば、紅き翼アラルプラのように掘立小屋を作るか、紛争地域を巡り続けるという手段もある。

問題なのは、終戦後に私達が発見されるとアリカ姫の代わりにケルベラス無限監獄に収容される可能性がある。
収容されずとも、指名手配犯となったら麻帆良に向かうことも困難になる。

尤も、既に懸賞金が懸けられているエヴァの場合はあまり変わらぬ

と言えるが。

「やはり、^{アラルフラ}紅き翼のご機嫌を取っておくのは世間的に必要と云うわけか」

「・・・本来なら一笑に付すことだが、問題を避ける為には必要不可欠か。悪の魔法使いも形無しだな」

「ならば、^{アラルフラ}急ぎ墓守り人の宮殿に向かうとしよう。出来るなら、^{アラルフラ}紅き翼が到着する前にある程度の攻勢を仕掛けておくのが望ましい」

「おいセイバー、それはやめておけ。前も^{アラルフラ}紅き翼より先に向かったせいで問題となったのだ。ここは^{アラルフラ}紅き翼より後に到着して話を切り出すのがいいだろう」

「だが、^{アラルフラ}紅き翼が攻勢準備をしている最中に訪ねることが出来るか？^{コスモエンテレイア}攻勢阻止の為に完全なる世界が攻めてきたと採られるのではないか？」

先でも後でも問題が生じるか。

アリカ姫やテオドラ第三皇女あたりが現地に居れば良いのだが、姫様方は後方の戦艦にて待機しているか、陣頭指揮を執っているだろうから彼女らを頼りにすることは難しいだろう。

となれば、^{アラルフラ}紅き翼に話を付けるしかないのだが、あの面々は些か脳筋過ぎるといふか、口より先に出る部類だろうから話し合いをするのも難しい。

手詰まりだな。

「だが、それ以外に解決する術がないというのであれば、そうするしかあるまい。セイバーの言うことも尤もだが、現状はこれが最善だよ、^{アラルフラ}間違いないな」

「ならば、^{アラルフラ}紅き翼が居るその場にアリカ姫、いや、テオドラ第三皇女がいるのを願うだけだな。それが最も勝手が良い」

「ん？あの姫様方を頼ろうとするのはわかるが、どうしてテオドラ

第三皇女なのだ？むしろ紅き翼アラルプラと接触するのであればアリカ姫の方が勝手がいいのではないか？」

「龍宮真名を預けるのはヘラス帝国の方がいいだろうと、そう思っただけだ。まさか、彼女を抱えたまま完全なる世界コスモエンテレケイアと戦うわけにはいかないだろう」

「解せんな。奴を抱えたまま戦えぬというのは理解できる。だが、一時的に預けるのであればどちらでも構わんはずだ。アリカ姫であろうと、テオドラ第三皇女であろうと変わらぬはずだぞ？」

「彼女は人と魔族のハーフだ。ならば預けるのは比較的理解の有るテオドラ第三皇女だろう。それにヘラス側の紛争地域にて保護したのだ。文句はあるまい」

「奴への配慮という奴か。確かに誰もが亜人と手を取り合えるというわけではない、予め理解のある方を頼るのは当然だな。亜人であるだけなら兎も角、奴は魔族とのハーフ。どちらも味方には成り得ぬかもしれないからな」

問題は受け入れを拒否された場合だ。

拒否される案件は二つ。

一つは、私達が紅き翼側アラルプラに立って協力するという案。

もう一つは、彼女が受け入れられなかった場合だ。つまり一時的な保護をも断られる、そういうことだ。

パターンとしては三種類。

一番良いのは両者共に承諾された場合だ。

なんといても現状抱える全ての問題を払拭できる。

最善且つ最適、この場合は麻帆良学園へ向かうまでもスムーズにいけるだろう。

後者のみのパターン、これは最低限得たい成果だ。

アラルブラ
紅き翼が我々を信用しないとはいえ、難民に手を差し伸ばさない為
政者はいない。

ましてそれが自国民であるのなら尚更のことだろう。
魔族とのハーフとはいっても、公の場に近い場所で交渉するのだからな。まず断れまい。

問題なのは両者とも断られた場合だ。

本来であるなら、龍宮真名の受け入れは断られないはずなのだが、
私とエヴァが完全なる世界の一味と判断された場合は例外になる。

つまりは、彼女もまた完全なる世界の一味であると見られる為、拒
絶される余地があるという訳だ。

「エヴァはどう思う。紅き翼アラルブラに対して交渉が成功すると思うか？」

「長々と言っておいてなんだが、無理だな。今、奴らの下に擦り寄
れば、泥船から逃げ出そうとするネズミの様に思われるだろう。墓
守り人の宮殿でどれほどの戦功を上げようとも、元完全なる世界と
いう扱いを受けるだろうな」

「となると、オステイア崩落の首謀者に仕立て上げられる可能性が
高いか。やれやれ、底なし沼に首まで浸かっているかのようだ。打
開策は何か考えられるか？」

「打開策はある。紅き翼アラルブラ、アリカ姫やテオドラ第三皇女に恩を売れ
るといふ手段がな。私達は完全なる世界と思われているのだ、それ
を逆手に取れば・・・」

「・・・戦争犯罪人としてアリカ姫を処刑する側に回れば良いのだ
な？元老院側に味方して、メガロメセンブリア元老院が完全なる世
界イアに支配されていると、そう見せれば良いと」

「この手段であれば、後の元老院議員であるクルト・ゲードルの助
力を求められるだろう。アリカ姫の名誉も回復することになるのだ、
不満など生じない。ただ、一部の者を除いて、私とセイバーは完全

エンテレケイア

なる世界の関係者だと確定することにはなるがな」

「その程度の問題は造作もない。今より状況が改善されるのだから、これ以上の成果を望むのは高望みというものだ。この手段を取る場合、彼女は どうする？ 連れて行つては彼女も完全なる世界コスモエンテレケイアに關与している と取られるぞ？」

「簡単な話だ。連れて行くが誰にも会わせなければいい。セイバーからもらった資料に王の財宝というものがあつただろう？ 実はあれを参考に同様の物を魔法で構成したのだ。所詮は贋作で、維持するだけで莫大な魔力を消費するという欠陥品ではあるが、以外と便利だぞ？」

「勉強熱心なことだ。それで擬似的な王の財宝を用いてどうするというのだ？ まさか、その空間に彼女を閉じ込めるといふわけでは無いのだろう？」

「直接放り込むという手段もあるが、ここはダイオラ魔法球を使う。魔法世界では何をすることも力は必要だ、まずは身を護る為にも、何れ再び誰かを護るときが来たときにも、な」

「基本はダイオラ魔法球の中で鍛錬してもらつたということか。その力を以て何をするかは彼女次第だが、せめて選り取れる選択肢は多いほうがいだろうからな。だが、彼女の鍛錬相手はいるのか？」

「私やセイバーが相手をしてやるには些か脆い。ある程度やれるようになるまで、奴の鍛錬相手はチャチャゼロに任せるつもりだ。・
・ダイオラ魔法球の中に入れておいたのを忘れていたわけでは無いぞ？」

「なるほど、だからチャチャゼロはいなかったのか。グレートブリッジの際も、夜の迷宮の際も一言も発しなかったから、どこにいたのか不思議に思っていた」

「というわりには何も言わなかったではないか。まあ、私としては二人つきりで居たかつたから聞かれても答えぬつもりだった」

「それで少しでも二人つきりで居たいということ、彼女をダイオラマ魔法球の中に閉じ込めるといわけか。名目は鍛錬なのだ、私
が不満を訴えるわけもないからな。それはいいのだが、エヴァ、最
初からここまで見通せていたのなら何故・・・」

「たまには私から意地悪をしてやらんことには、永遠に主導権を握
られそうなのでな？故に黙っていたというわけだ。ふふふ、中々思
い通りに事が運ぶというのは面白い。これは癖になりそうだ」

やれやれ、これは倍返しをする必要があるかな。

つと、それは兎も角、今後の方針は決定した。

コスモエンテレイア
完全なる世界との最終決戦には参戦しない。

遠目に戦場を伺う程度はいいかもしれないが、私達が参戦しても特
にメリットを得られそうにない。

ここはあくまで傍観者に徹する。

積極的に動くのは、戦争犯罪人としてアリカ姫が処刑される際だ。

この際に私達が元老院側の立場でアラルブラ紅き翼と対立すればいい。

その場で完全なる世界との関与を仄めかす発言をすれば、それが民
衆に噂として流れるだけで世間としては立派な事実になる。

元老院議員が如何に抗弁したとしても、エヴァの悪名から鑑みるに
覆すのは用意ではない。

まあ、関与は否定して私達に操られていたとは訴えるかもしれない
が、その場合でもアリカ姫は救われることになる。

操られていたのなら、死刑を執行するわけにも行かないだろうから
な。

それより先に、クルト・ゲードルと交渉の場を設けておく必要はあ
る。

もしくはテオドラ第三皇女との交渉か。

前者は空手形が過ぎて麻帆良に向かうのが遅れる。

クルト・ゲイデルが元老院議員になるのには時間が掛かるだろうか
らな。

後者は即時的に効果が見込めるが、影響力が問題だな。
連合側の支配地域に対してどれだけ効力を発揮できるか。
麻帆良に入れないのであれば頼る必要がない。

あれこれと悩んだが、それでも無理なら・・・

いや、存外この方がスムーズか？

歴史からそれほど逸脱しない形で・・・ふむ、いけるな。

— 先ずは先の通りに動いて、無理なら最悪そうしよう。

君が、KOUKI・Tが護ったマナ・アルカナはこれより後は私が
護る。

故に、君の居場所であった龍宮神社、少々拝借させてもらおうとする。
命を懸けて護ったほどののだ、不満はないだろう？— KOUKI・
TATUMIYA。

009 主人公、紛争地域にて要人を救助する（後書き）

アンケート、というほどのものではありませんが
これより後麻帆良学園にて覇肩にする生徒を誰にするか
そのアンケートを行おうと思います。

締め切りは麻帆良学園へ到着するまで

選択範囲は、エヴァと龍宮隊長を除く3 - A生徒とさせて頂きます。
一人3票で、同じ人物への3票でも三名へ1票ずつでも構いません。

覇肩とは、良くある話で言えば

魔法使いに関わって魔法を学んでいくというものもありますし
単純に登場回数といったものもあります。

ただ、注意して頂きたいことが一つ

現在の構想では、セイバー、エヴァ、龍宮隊長、チャチャゼロが同居
他の方は想定してはいません。

つまり、絡繰茶々丸は場合によっては主人公サイドにならない
ということです。

何名を選出するかは保留にしておきます。

もしアンケートが1件もなかったら

不選出になりますからね。

それはそれで面白いかもしれませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3120w/>

黒衣の騎士 誰が為に剣を取る

2011年10月2日20時15分発行